

研究ノート

南フランス・ブーシュ＝デュ＝ローヌ県南部の ロマネスク聖堂（1）

ーマルセイユのノートル＝ダム＝ラ＝ヴィエイユ＝マジョール旧大聖堂と
サン＝ヴィクトール修道院ー

中川久嗣

Les Églises Romanes dans le Sud du Département des Bouches-du-Rhône (1) :

La vieille cathédrale Notre-Dame La Major et l'Abbaye Saint-Victor de Marseille.

NAKAGAWA Hisashi

Résumé

À la suite de la monographie précédente, je traite ici les églises, les chapelles, les abbayes et les prieurés de l'époque romane ou du style roman qui se trouvent au sud du département des Bouches-du-Rhône. Je commence par La vieille cathédrale Notre-Dame La Major et l'Abbaye Saint-Victor de Marseille. Au moyen âge, diocèse de Marseille faisait partie du archdiocèse d'Aix-en-Provence, mais Marseille est l'une des plus anciennes villes christianisées de France. Sur chacune de ces deux églises, j'analyse son histoire brève, sa forme, sa structure architecturale, ses sculptures, et ses décorations, etc..

前稿までは南フランス・ガール県を取り扱ったが、本稿からは新たに南フランス・ブーシュ＝デュ＝ローヌ県を対象とし、マルセイユおよびその周辺地域に点在する中世のロマネスク聖堂について可能な限り知りうるものすべてを訪問・調査し考察を加える。そこで今回はまずマルセイユのノートル＝ダム＝ラ＝マジョール旧大聖堂とサン＝ヴィクトール修道院から始めることとした。この2つの聖堂は、ロマネスク期とは言っても、古い部分は古代後期の初期キリスト教時代（4-5世紀）にまでさかのぼるものである。

聖堂の配列は、おおよそ現在の行政地域区分に準じて整理することとし、ブーシュ＝デュ＝ローヌ県の県番号（13）、大まかな地域、そして自治体（Commune）の順で番号を付した（フランスの地方のコミューンはしばしば合併・再編が行われるので、最新のものには対応していないこともあり得る）。同一のコミューンに複数の聖堂がある場合は、「a. b. c. d.」というようにアルファベットで区分した。

本稿において用いる用語・訳語について。まず聖堂の名称については、本文中で建築物としてのそれを指す場合はそのまま「聖堂」とし、個別の名称としては「教会」あるいは「礼拝堂」を用いた。教区教会については、いちいち名称に「教区」を付けることはしていない。カテドラル（司教座聖堂）は個別の名称としては「大聖堂」と記した。「*basilique*」はわが国ではどちらかと言うと「バシリカ」と表記されることが多いが、本稿ではフランス語の発音に従って「バジリカ」としてある。「*chapelle*」は、聖堂内にあるものは「礼拝室」とした。

聖人を表す「*saint*」（または「*sainte*」）は、聖堂や礼拝室などの建築物や地名の場合はフランス語表記のまま「サン」または「サント」としたが（「サン=ヴィクトール修道院」など）、聖人名の場合は漢字で「聖」とした（「聖ウルスラ」など）。

身廊内部のベイは、西側から第 1 ベイ、第 2 ベイという順に数える。壁付きの方形柱（付け柱）は、英語の「ピラスター」ではなくフランス語のまま「ピラストル」（*pilastre*）としてある。また通常、身廊と内陣の間に架けられることが多い「*arc triomphal*」は「凱旋アーチ」とした。最後に細かいことであるが、数値の表記において小数点は、日本語標準にしたがってピリオド「.」を用いている。

取りあげる聖堂は、筆者が直接訪問・調査したものである。それぞれの聖堂についての参考文献・資料などの参照情報は、各聖堂ごとに記したが（Website は WS と略記）、全体を通してのビブリオグラフィは最後にまとめている。写真画像は筆者の撮影による。誌面の都合ですべての聖堂の写真画像をここに掲載することはできない。それらは筆者開設のウェブページ（<http://nn-provence.com>）で閲覧可能である。

13.1.1a マルセイユ／ノートル＝ダム＝ラ＝ヴィエイユ＝マジョール旧大聖堂

(Ancienne cathédrale Notre-Dame La Vieille Major, Marseille)

マルセイユは現在フランス第 2 の規模を誇る大都市で、プロヴァンスのみならず南フランス全体における政治・経済・文化の中心としての地位を占めている。ここでは古代から 18 世紀の大革命の勃発前までであるが、その歴史をプロヴァンス全体のそれも視野に入れながら、まずは政治史的な出来事を中心に簡単に見ておこう。

プロヴァンスは古くは紀元前 2 世紀頃までは海岸地方から内陸部にかけて、ケルト系サルウィー族が定住していた。彼らは、この地域でいくつものオピドゥム（要塞集落）を営み、より東部の沿岸地方にいたリグリア族とともに、ローマのガリア進出をはばんでいた。エクス=アン=プロヴァンスの西およそ 20 キロにあるロクペルテューズ（Roquepertuse）では、サルウィー族の戦士を讃える前 5 世紀頃にまでさかのぼるケルト人の聖域が見つかった。1919-1927 年に最初の発掘が行われ、次いで 1960 年代に大々的な考古学的調査が進められた。居住区の北側に 22 メートルのプラットフォームが残り、そこからは前 3 世紀と推定される「ヘルメス」の双頭彫刻、戦士の座像、鳥の彫刻などが見つかった。この聖域は、ローマによる

紀元前 125-123 年の戦役あるいは前 49 年のカエサルによるマッサリア攻略のプロセスで破壊された模様である。

そのマッサリア (Massalia、現マルセイユ) は、前 7 世紀後半の前 620 年あるいは 600 年頃に、小アジアのギリシア人であるフォカイア人が交易のための拠点として建設した。政治組織としては 600 人評議会 (timouchoi) が知られ、その中から 15 人の最高指導者が選ばれて行政を運営したという。マッサリアの最盛期は前 4 世紀頃で、彼らは地中海沿岸に沿って、あるいはガリア内陸部に次々と交易拠点となる植民都市を作っていった。サン・ブレーズ、オルビア、アンティープ、ニース、アグド、そしてグラヌム、アルル、アヴィニョン、カヴァイヨンなどである。



13.1.1a マルセイユ、ギリシア時代の遺構（手前）

マッサリアのギリシア人は、最初は内陸部のガリア人すなわちケルト系サルウィー族と交易などを通じて平和的に共存していた。しかしすでに前 2 世紀後半には地中海沿岸地域のリグリア人がマッサリアの交易船を攻撃するなど内陸のガリア人との一定の緊張関係は続いていた。前 125 年、アントルモン (Entremont、エクス＝アン＝プロヴァンスの北約 4 キロ) に拠点を置いていたサルウィー族がマッサリアを攻撃するようになった。マッサリアはローマに援軍を要請し、前 124 年にローマの執政官ガイウス・セクスティウス・カルヴィヌス (Gaius Sextius Calvinus) がサルウィー族と戦い勝利し、アントルモンを破壊した。セクスティウスは前 122 年にアントルモンの南にアクアエ・セクスティアエ (Aquae Sextiae、現在のエクス＝アン＝プロヴァンス) を建設し、ローマ軍を駐留させた。ここがプロヴァンスにおける最初のローマ都市となる。

前 121 年、ローマの執政官ドミティウス・アエノバルブスとファビウス・マクシムスが引き続きアルウェルニー族 (アロブロージュ族を含む) と戦ってこれに勝利し、属州ナルボネンシスを創設した。ローマの植民都市ナルボンヌが建設されたのは紀元前 118 年のことである。その後もローマによるプロヴァンス征服は着実に進行する。前 102 年、マリウス (Marius) が、アクアエ・セクスティアエ近郊 (サント・ヴィクトワール山麓) で、南下してきたゲルマン系テウトン族 (テウトネス族) の 20 万にもものぼる大軍を破った。その後、前 58 年からはカエサルがガリア征服戦争を進め、最終的には紀元前 52 年の有名なアレシア (アレジア) の攻囲戦で、アルウェルニー族のウェルキングトリクス (ヴェルサンジェトリクス) の指揮するガリア諸部族総決起を破ることで、ガリアはほぼローマの支配下に入った。以後プロヴァンスはフランスの中でもローマ文明の影響を強く受けた地域となり、あちこちにローマ都市が建設された。プロヴァンスの名はローマ属州「プロヴィンキア」に由来する。

マッシリア (Massilia、マッサリアのラテン語名) は、前 49 年から 45 年に起こったローマ内戦、すなわちカエサルとポンペイウス (そして元老院派) の争いにおいて後者の側についたために、前 49 年には数ヶ月にも及ぶカエサルによる攻囲を受け降伏した (この攻囲戦はカエサ

ルの『内乱記』に詳しい)。内戦後はカエサルによって冷遇され、内陸の領土をすべて失った。その政治・経済的な地位は、内戦においてカエサルに味方したアルル(古代名アレラテ)の後塵を拝することとなる。しかしローマ時代になっても地中海交易による経済的活動は活発に継続された。

4世紀から本格化したいわゆるローマ帝国領内へのゲルマン民族の大移動の混乱の後で5世紀に西ローマ帝国が滅亡すると、東ゴートや西ゴートといった諸部族による支配が続き、ほどなくフランク王国(メロヴィング朝)の統治下に入る。しかし814年のシャルルマーニュ(カール大帝)の死後、ヴェルダン条約やメルセン条約などによって王国の分割が続き、プロヴァンスは中フランク王国を構成するブルグント王国の一員となった。ブルグント王は形式的にはプロヴァンスの上級支配者であったが、実質的には歴代のプロヴァンス伯(あるいはアルル伯)がプロヴァンスを支配した。ただし、プロヴァンスにおけるローヌ河の東岸地域は、法的には10世紀から神聖ローマ帝国の領土であり、最上級宗主は神聖ローマ帝国皇帝であった。12世紀には皇帝フリードリヒ1世(バルバロッサ、在位1155-1190年)が、1156年にブルグント女伯ベアトリス(Béatrice de Bourgogne/Beatrix von Burgund)と再婚し、1178年7月30日にはアルルにおいて正式にブルグント王として即位している。

時代が少し戻るが、8世紀はプロヴァンス(とマルセイユ)にとって大いなる受難の時代となった。イスラームの進出によってその交易活動が突然中断することとなったのである。プロヴァンスから北イタリア沿岸地域は、地中海の制海権を掌握していたイスラーム勢力によって、たび重なる侵略と略奪を受けた。かつてアンリ・ピレンヌは、今や古典的名著となった『マホメットとシャルルマーニュ』(1937年)において、その時代プロヴァンスの地中海沿岸であるリヨン湾からイタリアのリヴィエラ地方まで、港も都市も打ち棄てられてしまい「死の風が吹いていた」と表現した。

732年の有名なトゥール・ポワティエの戦いで勝利した後も、引き続きイスラームを攻めるメロヴィング朝フランク王国の宮宰カール・マルテルの軍は、今度は737年にマルセイユを略奪している。カール・マルテルの軍による被害(イスラーム軍によるものではない)は、プロヴァンスのみならず、ラングドックにおいても甚大であったことはよく知られている。一方イスラーム勢力は9世紀になると、サン=トロペ東方の山中のフラクシネートゥム(Fraxinetum/現在のLa Garde-Freinet)に軍事的拠点を築き、そこから周辺地域への略奪行為を続けた。フラクシネートゥムのイスラーム軍は、しばしば遠くアルプス地方にまで足を延ばし、972年にはクリュニー修道院長マイウール(Maieul/Mayeul)が、イスラームの軍勢に襲撃され囚われの身となるという事件まで起きている。その翌年の973年(あるいは974年)、当時のアルル伯兼プロヴァンス伯であったギヨーム1世(Guillaume Ier de Provence)が、兄のルボー1世(同じくプロヴァンス伯を名乗っていた)や周辺諸侯と協力してフラクシネートゥムを攻略し、その結果、南フランスからイスラーム勢力を一掃することに成功した。ギヨーム1世はこのことにより「解放者」(le Libérateur)とも呼ばれる。

中世も10世紀になると、もとはカロリング家に連なる貴族であるとも言われるボゾン(Boson)家のルイ3世(盲目王・西ローマ皇帝)が低ブルグント王となり、その従兄弟であ

るウーゴ（ユーグ）がプロヴァンス公としてこの低ブルグントの首都をヴィエンヌからアルルに移した。この時期のブルグント王国は別名アルル王国とも呼ばれる。ウーゴはその後、イタリア王位と引き替えに高ブルグント王ルドルフ 2 世にアルル王国の王位を譲り、このルドルフの系統が 1032 年までプロヴァンスを含むブルグント王の地位を引き継いでゆく。ただしこの場合も、上級封主権とは別に、いわば現場であるプロヴァンスでは、ウーゴから続くボゾン家の系統であるギヨーム 1 世系の家系とルボー1 世系の家系が、10 世紀から 11 世紀初めにかけてプロヴァンス伯（共同伯）として実効支配を続けた。

マルセイユでは、プロヴァンス伯の宗主権のもとにある副伯（vicomte）、そして司教、サン＝ヴィクトール修道院長の 3 者がそれぞれ大きな権力を保持し、均衡が保たれていた。マルセイユ副伯領は、最初はブルグント王コンラッド（3 世／在位 937-993 年）によって 948 年に設置され、最初の副伯はヴィエンヌ地方出身でトレツ（またはトレス／Trets）の領主でもあったアルルーフ（Arlulfe、没年は 965 年頃）と言われる。ただしこれはあまり確かなことではない。最初のマルセイユ副伯は彼の息子ギヨーム（Guillaume、在位 977-1004?）であるとも言われる。マルセイユ司教のホノラトゥス（在位 948-978 年）がこの副伯の一族（やはりアルルーフの息子）であったことは確認されている。マルセイユにおける副伯の居城（居館）は、現在の「考古学公園」あたりにあった「ル・トロネ」（Le Tholonée）と呼ばれる建物と、ラシドン（Lacydon）すなわち現在のヴェー・ポール、つまり旧港の北岸西側のサン＝ローランの丘（地中海に向けて半島のように突き出た場所）にあった「バボンの城」（Château de Babon）であった。ここはラ・マジョール大聖堂の少し南に位置する。なおマルセイユ副伯家は、1193 年からサン＝ヴィクトール修道院長であったロスラン（Roncelin）が副伯位を継ぐが、彼が 1215 年に没した後は断絶している。

11 世紀半ばから 12 世紀にかけて、ギヨーム 1 世の家系はカタルーニャのバルセロナ伯家と、またルボー1 世の家系はトゥールーズ伯家と婚姻関係を結ぶことによって、プロヴァンスはバルセロナ伯（後のアラゴン王家）とトゥールーズ伯による分割（あるいは競合）統治の時代を迎えることとなる。具体的にはプロヴァンス伯位は、1112 年にバルセロナ伯レーモン・ベランジェ（Ramon Berenguer III、1082-1131）が、ジェヴォーダン伯を兼ねていたプロヴァンス女伯ドゥース（Douce de Gévaudan）と結婚したことでプロヴァンス伯レーモン・ベランジェ 1 世（Raimond Bérenger Ier le Grand）となった。バルセロナとトゥールーズの両伯家は、1125 年に協定を結び、トゥールーズ伯はデュランス川の北を、バルセロナ伯はデュランス川の南を支配領域とすることで合意した。

プロヴァンス伯位はその後レーモン・ベランジェ 1 世の子孫が継いでゆくが、1125 年の協定にもかかわらず、トゥールーズ伯家との緊張・対立関係は続いていたようである。マルセイユでは司教に対する住民の反抗が起き、彼らは一時的にトゥールーズ伯に接近した。しかし 13 世紀にトゥールーズ伯がカタリ派に対するアルビジョワ十字軍によってその力を消耗してゆくのに対して、プロヴァンス伯の方が逆にその力を強めてゆく。アラゴン王と同族であったレーモン・ベランジェ 4 世（または 5 世／Raymond-Bérenger IV、プロヴァンス伯在位 1209-1245 年）は、バルセロナ伯・プロヴァンス伯とともにフォルカルキエ伯をも兼ね、ヨーロッパでも

とりわけ有力な封建諸侯の一人となった。

彼は 1245 年にエクス・アン・プロヴァンスで没したが、4 人の娘を残した。そのうちマルゲリート (Marguerite) はフランス国王ルイ 9 世 (サン=ルイ) と、サンス (Sance) はコーンウォール伯リチャード (Richard of Cornwall) と、そしてエレオノール (Éléonore) はイングランド王ヘンリー 3 世 (Henry III) と結婚した。プロヴァンス伯位は、末娘のベアトリス (Béatrix de Provenc、在位 1245-1267) が継いだ。1246 年に彼女が結婚相手としたのが、フランス国王ルイ 9 世の弟でシチリア王・ナポリ王を兼ねることになるシャルル・ダンジューである (シチリア・ナポリ王としてはカルロ 1 世)。こうしてプロヴァンスはアンジュー家の支配下に入ることとなる。なお 12 世紀にはバルセロナ伯はアラゴン王を兼ね、そのアラゴンはピレネー方面でフランス王家と領土争いを繰り広げていたが、アラゴン王はルイ 9 世との間で 1258 年に締結したコルベユ条約により、ピレネー以北における権益をすべて放棄している。シャルル・ダンジューは 1285 年に没するが、ナポリ王とプロヴァンス伯は娘のジョアンナ (ジャンヌ) 1 世が継ぐこととなった。

続く 14 世紀から 15 世紀初めにかけては、言うまでもなくアヴィニオン教皇庁とそれに続くシスマ (教会分裂) の時代である。アヴィニオンは現在の行政区分ではヴォークリューズ県であるが、14 世紀には南フランスにおける聖界の中心地 (文字通りの「聖座」) でありつづけた。先にも触れたように、アヴィニオンの教皇ウルバヌス 5 世 (ギヨーム・ドゥ・グリモアール) は、教皇即位前の 1361-1362 年の間、マルセイユのサン=ヴィクトール修道院長であった。

同じ時代、マルセイユは深刻なペスト禍に襲われたり (1347-1348 年)、あるいは 1423 年には、13 世紀から続いていたナポリの支配権をめぐるアンジュー家とアラゴン家の争いに巻き込まれて、後者による攻撃を受け略奪されるなど不穏な出来事が続くが、しかしそれも 15 世紀に入るとしばしの平穏な時期を迎える。すなわち 1434 年にアンジュー家のルネ、すなわちルネ・ダンジュー (René d'Anjou) がプロヴァンス伯 (在位 1434-1480 年) となった時代である。ナポリ女王でプロヴァンス伯であったジョアンナ 1 世のあと、1414 年からナポリ王位を継いでいたジョアンナ (ジャンヌ) 2 世が、ナポリ王とプロヴァンス伯の後継としてルネを選んだのであった。

彼は他にもアンジュー公やロレーヌ公、フォルカルキエ伯などを兼ねたのであるが、とりわけプロヴァンスに愛着を抱き、エクス・アン・プロヴァンスに留まり続け、「善王ルネ」(le Bon Roi René) と呼ばれることとなる。文化や芸術を愛したルネは、アンジューに戻ることなく 1480 年、71 歳でエクス=アン=プロヴァンスにおいて亡くなった (ただし墓はアンジェにある)。プロヴァンス伯領は甥のアンジュー公シャルル 5 世がいったん継承するが (プロヴァンス伯としてはシャルル 3 世)、翌年の 1481 年に 35 歳で没し、プロヴァンス伯領



13.1.1a 善王ルネ (Aix-en-Provence)

は国王ルイ 11 世が相続し、結局フランス王国に編入されることとなった。

16 世紀には、フランスのヴァロワ王家と神聖ローマ帝国のハプスブルク家の間でいわゆる「イタリア戦争」が行われ、その余波としてプロヴァンスは 1524 年と 1536 年に、神聖ローマ帝国軍の侵攻を受けている。ただしいずれの場合もマルセイユはかろうじて陥落を免れている。時は宗教戦争の時代を迎えていたが、マルセイユはエクスとともにプロヴァンスにおけるカトリック側の橋頭堡となった。1533 年 10 月 28 日には、王太子アンリ（後のアンリ 2 世）とカトリクス・ドゥ・メディシスの結婚式がマルセイユで行われている。16 世紀後半（1591-1596 年）にはカトリック側に与するシャルル・ドゥ・カソー（Charles de Casaulx）による独裁というエピソードもあった。なお中世以来、マルセイユはコンシュラ（執政・統領）が運営の主体を担った自治都市としての性格を持つが、ルイ 14 世を頂点としたブルボン王朝による絶対王政下で、その政治的自立性が実際にはどの程度のものであったのか、すなわちパリの王権によって次第にその自立性が浸食されていったと見るか、王権の浸食に対抗する強度を保持し続けたと見るかは、議論が分かれる。ただし政治的な自立性の強弱にかかわらず、マルセイユの貿易港としての経済的な力と繁栄は、常に保たれていたことは確かなことである。

1720 年には、1347-1348 年に続いて再びペスト禍がマルセイユを襲った。レバントからやって来た交易船がこの忌まわしい疫病を街に蔓延させ、マルセイユの住民 9 万人のうち、最大 4 万人とも言われる犠牲者を出した。しかしペストによる人口減少は、疫病収束後は比較的速やかに増加に転じ、かつての経済的繁栄は回復していった。1789 年に大革命が起こった後、フランスとオーストリアとの戦争の時に、ストラズブール駐留の工兵隊長ルージェ・ド・ライルによって書かれた革命歌（1792 年 4 月作曲）が「ラ・マルセイエーズ」と名付けられた。マルセイユの歴史に直接結びつくものではないが、周知のように 1792 年 8 月のテュイルリー襲撃事件の際にマルセイユ連盟兵によって歌われ、後にフランス国歌となる。

ここまでの歴史を、今度はマルセイユを中心に教会史の側から見てみよう。

マルセイユにキリスト教が浸透したのは早くも 2 世紀のこととされる。そもそもイエスの刑死後の紀元 35 年頃に、ラザロ、マグダラのマリア、マルタ他、イエスに縁の人々がパレスティナを逃れてサント＝マリー＝ドゥ＝ラ＝メールに漂着し、それぞれがプロヴァンスの各地に散らばって、そこで布教活動をしたとされるが、しかしこれはあくまでも伝説なのであって、史実として確認されているわけではない。マルセイユに定着してここで司教になり、その後 80 年頃に殉教したとされるラザロについても、その真偽は不明である。プロヴァンスではなくキプロスの初代主教になったとの説もある。

マルセイユのラシドン（旧港）の南側には 2-3 世紀頃からキリスト教徒の墓地が広がり、そこには« Paradis »と呼ばれる埋葬地が東西に長く広がっていた（現在の« Cours Honoré d'Estienne d'Orves »あたり）。また聖ペトロや聖ティルスに捧げられた礼拝堂などもすでに建てられていたという（ただしこの 2 つの礼拝堂の正確な建築年代はよく分からない）。古代後期である 4-5 世紀頃にはキリスト教はプロヴァンスに着実に浸透していった。マルセイユはフランスでも最も早くキリスト教化された都市の 1 つであるが、マルセイユ以外にはアルルやエ

クスは言うに及ばず、オランジュ、アプト、ヴェゾン、そしてニカエア（ニース）といった諸都市がキリスト教共同体の核として成長していた。よりイタリアに近いカンヌ沖のレラン諸島にあるサン＝トノラ修道院（Monastère de l'île Saint-Honorat）は 5 世紀初頭に創設されたが、ヨーロッパ各地にその名声が広まると同時に各地から巡礼たちもやってきた。同じ 5 世紀初めには、マルセイユでもヨハネス・カシアヌスによって、サン＝ヴィクトール修道院（Abbaye Saint-Victor）[13.1.1b] が創建されている（後述）。この 2 つの修道院は、中世期を通じて南フランス全体に分院を数多く作るのみならず、幾人もの司教（時には教皇）を輩出し、その宗教的・精神的な影響は、南フランスは言うまでもなく、北フランスにも遠く及び、その名声はまことに計り知れないものがあつた。先に触れたように、14 世紀の教皇ウルバヌス 5 世は、後



13.1.1a ラ＝ヌーヴェル＝マジョール大聖堂

者サン＝ヴィクトール修道院の出身である。

さて、マルセイユがフランスにおいて最初にキリスト教化された都市であつたというのは確かなことではあるけれども、しかしこの地の教会史の初期についてはやはり不明な点が多い。司教座の正確な創設年代は不明である。最初はその存在が確認される司教はオレシウス（Oresius）で、彼は 314 年にアルルで開かれた教会会議に出席している。オレシウスの時代には司教座（大聖堂）はまだ建設されていなかった。5 世紀前半頃の司教とされるプロキュルス

（Proculus）は、政治的な優位性を巡ってエクスやアルルと争つたが、司教座の建設が進められたのも彼の時代のことであつたとされる。その場所は、古代ギリシア時代以来マルセイユの集落が形成されていたラシドンの入り江北側のサン＝ローランの丘の少し北西側の、地中海に面した場所（古代の囲壁のすぐ東側）であつた。そこには現在もノートル＝ダム（サント＝マリ）＝ドゥ＝ラ＝マジョール大聖堂（Chthédrale Notre-Dame/Sainte-Marie-de-la-Major）が建っている。この大聖堂は「ヌーヴェル（新）・マジョール」などとも呼ばれる。

初期キリスト教時代である 5 世紀の最初のカテドラル（司教座聖堂）はノートル＝ダム（聖母）に捧げられ、その規模はおおよそ長さ 50 メートル、幅 25 メートルで、床には幾何学文様などのモザイクが敷かれていた。聖堂のすぐ北側には 1 辺が 24 メートルの正方形の建物の上に八角形のクーポールが載る「サン＝ジャン洗礼堂」（Baptistère Saint-Jean）が建てられていた。1 階の正方形の建物は、内部は四隅に半円形のニッチのアプス（小後陣）が付けられていた。中央に位置する洗礼槽はやはり八角形で、その周囲をおそらくは古代の建物から転用・再利用されたと思われる 8 本の円柱が取り囲み、その外側は周回路となっていた。列柱の上に載るクーポールは高さおよそ 18 メートルであつたとされる。マルセイユのこの洗礼堂の規模は、プロヴァンスでも抜きん出ている、エクス、シミエ、フレジュス、リエズ（リエ）あるいはミラノやローマなどの洗礼堂よりも大きなものであつた。また洗礼堂の床は立派なモザイクで飾られていた。

この司教座付属の洗礼堂の位置は、ちょうど今のノートル＝ダム＝ラ＝マジョール大聖堂の身廊の北東端（交差部の南東部分）である。13 世紀半ばまで使用されていたが、その後はサン＝ローラン教会が洗礼の儀式を継承し、5 世紀の古い洗礼堂は廃墟化した。部分的に残っていた遺構も、19 世紀に今のカテドラルが建設される際にすべて取り壊されて消滅した。なお 5 世紀の司教館は洗礼堂の北東側に建てられていたと思われる。この司教館もやはり豪華な床モザイクで飾られていた。こうして司教座聖堂、洗礼堂、司教館などがこの場所で司教座地区（groupe épiscopal）を形成していたのである。なおこの司教座地区で発見されたモザイクの断片は、現在はマルセイユ歴史博物館（Musée d'histoire de Marseille）に展示されている。

8 世紀のイスラーム勢力の侵攻あるいはカール・マルテルによる略奪などによって 5 世紀の最初のカテドラルは破壊されてしまった。司教はラシドンの入り江の反対側にあったサン＝ヴィクトール修道院に避難したという。ようやく 11 世紀になってかつての場所に司教座が再建され、その際に、やはり旧市街にあったノートル＝ダム＝デ＝ザクール教会（Notre-Dame des Accoules）と区別するためにラ・マジョール（La Major）と呼ばれるようになった。

11 世紀のカテドラルは短命で、12 世紀の司教ポンス 2 世（マルセイユ副伯の家系）の時代になって、パルセロナ伯でプロヴァンス伯でもあったレーモン＝ベランジェ 2 世の庇護のもと、プロヴァンス・ロマネスク様式で再び司教座が建設された。その際には 11 世紀の建物の一部（後陣部など）を保存する形で工事が進められた。このロマネスク様式のカテドラルは、もともとは身廊が 5 ベイからなる大きなものであったが、19 世紀初めにはすでに 3 ベイに切り縮められており、1852 年から始まった現在の新しいカテドラル建設（完成は 1893 年）のためにさらに 2 つのベイが取り壊されてしまった。現在身廊部に残るのはわずか 1 ベイだけである。すべてが破壊されなかったのは奇跡であるとも言われる（ただし古い洗礼堂は消滅した）。

12 世紀に建設されたロマネスク様式の古いカテドラルは「ラ・ヴィエイユ・マジョール」（La Vieille Major）などと呼ばれる（以下、「ラ・マジョール」と記す）。今も触れたように長い歴史の中で次第に切り縮められ、今日では新しくて大きな今のカテドラルのすぐ東側に、慎ましげにその姿をとどめるだけである。新しいカテドラルが南北方向を向いているのに対して、旧カテドラルは、ロマネスク聖堂の伝統に従って東西方向を向き、後陣は東側に建てられている。



13.1.1a ラ・ヴィエイユ＝マジョール南面



13.1.1a ラ・ヴィエイユ＝マジョール主後陣

「ラ・マジョール」の西側は切り詰められた身廊部（主身廊と南北の側廊）の断面である。頭部は半円形ヴォールトのアーチとなっている。この断面には隔壁が作られていて内部を直接見ることはできない。反対側の東面は、中央に五角形の主後陣があり、その左右には、かつては半円形であったがその後に平面形に作り替えられた小後陣が並ぶ。北側の小後陣にはさらにその北に方形の聖具室・礼拝室が増築されている。主後陣の西側にはトランセプト（翼廊）の交差部の上にクーポールが作られている。ただしクーポールの外側は方形の建物で、一番上にドームが載せられているのが見える。北の小後陣の西側、つまり北側のトランセプトのすぐ外側に当たる位置に小さな方形の塔が立っている。その塔の一番上にはメルロンが並んでいる。同じような小塔は、19世紀まで南側のトランセプトにも付けられていたが、その後取り壊されて今は見られない。聖堂のすぐ東側の地下には、2002年に、高速道路 A55 と旧港をつなぐトンネルが、後陣部分をぎりぎり避けるようにして建設された。その名も「ラ・マジョール・トンネル」と言う。このトンネル工事がロマネスク聖堂の損傷を結果しなかったのは幸いなことであった。

「ラ・マジョール」の内部は、直近では 2017 年から続けられた修復工事によって、きれいな状態で整備されている。西ファサード（19世紀に取り壊された身廊の断面）の中央に開けられた扉口から入ると、主身廊の残された唯一のベイに階段を伝って降りることになる（床面が扉口より低い）。身廊のベイから東へ向けて交差部、短い内陣、そして後陣が、それぞれ石段を少しずつ上る形で連続する。主身廊の南北両側には側廊が並ぶ。南北幅のある主身廊に比べて側廊は短く、ほぼ正方形である。身廊および内陣のベイの天井は半円筒形トンネル・ヴォールトで、二重になった半円形の横断アーチが架けられている。側廊の仕様も同様である。ただし、南側の側廊の第 1 ベイと第 2 ベイではヴォールトの架けられている方向が異なる。また内陣の南北に付けられた側廊のベイの天井は多角形のドームとなっている。

主身廊第 1 ベイと内陣の間のベイは、交差部（*croisée de transept*）である。通常の聖堂建築では、交差部とは身廊（あるいは内陣）と、あたかも十字架の左右の腕のように南北に張り出したトランセプト（翼廊）が文字通り交差するベイのことを言うが、マルセイユの「ラ・マジョール」の場合、南北のトランセプトにあたるベイが、身廊と並行する側廊のベイの 1 つとなっており、とりわけそれだけが十字架の腕（横木）のように張り出しているわけではない。トランセプトとその前後（東西）の側廊のベイとの違いとして区別できるのは、天井のヴォールトの方向とその高さくらいである。しかし何よりも、身廊と内陣の間の中央のベイの上に八角形のクーポールが載せられているので、このベイを交差部と呼ぶのである。

交差部のベイを四隅で支える柱は、横断アーチや側廊の内側のアーチが重ねられたピア（束ね柱）となって床まで下りる。八角形のクーポールは、正方形の基壇の四隅に付けられた扇形の大きなトロンプの上に載せられており、そのトロンプには四大福音書記者を表す 4 つの生き物（天使、ワシ、ライオン、牛）の彫刻が付けられている。クーポールのドームは中央頂部に円環（*oculus*）があり、そこから角を面取りされた 8 本の方形のリブが放射状に広がって下りる（その形はわずかに歪みがある）。リブはそれぞれ小さなキュロ（モディオン）が受け止める。それらのキュロは装飾が彫刻されたものであるが、摩耗していてその形は判然としない。リブ

で区切られたクーポールの 8 つの面のうち、南北 2 つの面には、半円頭形の窓が開けられており、採光の役割を果たしている。

「ラ・マジオール」の交差部を、他の聖堂のそれよりもいっそう見事なものとしているのは、南北が長い長方形のベイの上に、クーポールの正方形の基壇を載せるための建築的な工夫である。交差部を囲む四辺の二重アーチのうち、南北のアーチの上に、それぞれ 5 つのセグメンタル・アーチが階段状に重ねられて迫り上がり、長方形のベイを正方形に狭めてゆくのである。よく似た仕様で交差部の大きさを変える例は、プロヴァンスでは例えばアヴィニオン（Avignon）やノーヴ（Noves）、あるいはラングドック（ガール県）のサン＝ローラン＝デ＝ザルブル（Saint-Laurent-des-Arbres [30.1.26]）などに見られる。特にサン＝ローラン＝デ＝ザルブルの交差部は、マルセイユの「ラ・マジオール」のものに最も類似していると思われる。しかしマルセイユのものは、クーポールのドームに架けられたリブとともに、南北の階段状アーチ列の数とその均整さ、繊細さなど、全体的な完成度と美しさという点で他よりも抜きん出ている。もちろん例えばカオールのサン＝エティエンヌ大聖堂（Cathédrale Saint-Étienne de Cahors）のように、交差部のベイを最初から東西辺を長くして大きな正方形にしたうえで、やはり大きなクーポールを載せることも可能だったであろうし、あるいはアルル・アリスカンのサン＝トノラ教会（Église Saint-Honorat des Alyscamps d'Arles）のように、長方形のベイの上にそのまま長方形の（南北方向に長い）クーポールを作るということもできたであろう。しかしマルセイユのものは、建設時期の事情もあるものであろうが、あえて小さめのクーポールを載せることによって、そのクーポールおよび階段状アーチ列の美しさを積極的に見る者に提示しようとしたのではないかとさえ思えるほどに見事な仕様なのである。

内陣のベイは東西が短いもので、南北の側廊のベイとそれぞれ半円頭形の出入口を介して行き来できるようになっている。この内陣のベイの東は、これもまた非常に美しい半円形の主後陣となる（ただしかなり修復されている）。壁面はニッチの半円アーチが 7 つ並ぶアーケードで、それらのアーチは太いピラストル（近代のもの）となって床面に作られた基壇まで下りるが、中央のアーチだけは左右を小円柱が支える。この 2 本の小円柱は縦溝が付けられた細長いもので、柱頭がアーチを受け止めている。向かって右側の柱頭彫刻はシンプルなアカンサスである。またこの中央のアーチの真上には、隅切りされたうえで二重のアーチに枠取りされたロマネスク様式の窓が開けられている。

この窓の左右にはコーニスが巡り（窓がコーニスを中断している）、その上に架けられた半ドームには、頂部の円環から、角部を面取りされた 6 本の強固な方形のリブが放射状に広がる。このリブはコーニスに並べられたコンソール（モディオン）が受け止める。これらのコンソールは近代のものである。

主後陣の南北には、もともとは半円形の小後陣が作られていたが、13 世紀以降にそれぞれ正方形の礼拝室に作り替えられた。北側は「サン＝セレウス礼拝室」（Chapelle Saint-Séréus）である。聖セレウスは 6 世紀のマルセイユ司教で、偶像破壊を強力に推し進めたことで知られる。礼拝室の天井は丸窓を中心とした 4 分交差リブ・ヴォールトとなっている。北側の壁には尖頭形のニッチであるアルコソリウムが付けられている。この礼拝室には、よく知られた大理石製

の祭壇石が置かれている。この祭壇は 1022 年に司教レーモン 1 世（または 2 世）がロマネスク期の墓石を転用して「ラ・マジョール」の内陣に主祭壇として据えたものである。18 世紀初めに現在の場所に移された。その祭壇の前面部の彫刻は、太い円柱とそこに架けられた玉縁飾りのアーチが 3 つ並ぶニッチのアーケードになっている。エコワソン部分には四大福音書記者を表す 4 つの生き物が彫刻されている。アーケード中央のアーチの中には幼子イエスを膝に抱いて威厳を持って座る聖母（*Vierge en majesté*）、その左右両側のアーチの中にはそれぞれ司教の姿をした人物が立っている。J.M. Rouquette によれば、その 2 人は向かって左側が聖カナ（*Saint Cannat/Canus Natus*）、右側が聖ラザロである。一方、Kingsley Porter (1923) は、右側は聖アントニヌス（*Saint Antonin*）であるとしている。彼はまたこの「ラ・マジョール」の聖母子像が、シャルトルの西ファサード南側扉口のタンパンの聖母子像に直接影響を与えたものであるとしており、F. Benoit (1933) もその見方を採用しているが、ただしこれについては未だ議論がある。なお聖カナは 5 世紀後半のプロヴァンスの隠修士であり、後にマルセイユ司教となった人物である。

サン＝セレウス礼拝室から側廊部を西へ向かうと、まず内陣の北側にあたる短いベイがある。このベイの北壁には聖具室に入るための扉が付けられている。さらに交差部のすぐ北側のトランセプトにあたるベイには聖ラザロの祭壇が据えられている。二重のアーチがポーチのようにして連なる祭壇である。このポーチ状のアーケードの上には中央に聖母、その両側にマグダラのマリアと聖女マルタ、さらにその外側に 2 人の司教（聖カナと聖ラザロか）の立像が置かれている。向かって左側のアーチの下が聖ラザロの祭壇で、中央にラザロ、その左右には向かって右側に聖女マルタ、左側にマグダラのマリアの像が据えられている。向かって右側のアーチの下にはニッチが 2 つ作られており、そのうち向かって左側のものにはかつては聖ラザロの聖遺物箱が置かれていたという。さらに側廊部を西へ進むと、身廊（第 1 ベイ）の北側に前室のベイを介してサン＝ルイ礼拝室（*Chapelle Saint-Louis*）がある。床から立ち上がる細くて繊細なリブが天井で交差している。また北壁にはニッチの尖頭形アルコソリウムが作られ、その上にはゴシック様式の大きな窓が開けられている。本来はさらにこの礼拝室の西側に、大きな聖母礼拝堂が続いていたが、19 世紀に今のカテドラルが建設される際に取り壊されてしまった。

主後陣の南側（南側側廊部の東端）には交差リブ・ヴォールトが架けられた正方形の「サン＝サクルマン礼拝室」（*Chapelle du Saint-Sacrement*）がある。別名サント＝クロワ礼拝室（*Chapelle Sainte-Croix*）とも呼ばれる。南側の壁には尖頭形の大きなアルコソリウムが作られている。そのアーチを縁取るのは円筒形モールディングで、小さな円柱がそのモールディングを左右で受け止めている。このアルコソリウムの反対側の壁には、高さのある立派な石造祭壇が埋め込まれている。一番上には教皇（どの教皇かは不明）の紋章とドクロなどが彫刻されている。

この礼拝室の西側に続くベイは「死者たちの礼拝室」とも呼ばれ、その南壁にもやはり同じ仕様のアルコソリウムが作られている。さらにその西側のベイ、つまり交差部の南側トランセプトには、聖具室への出入口が付けられている。ただしその聖具室は現在は消滅し、その出入口は外部との行き来のために使用されている。南側側廊部の西端は、身廊第 1 ベイ北側のそれ

と同じく、現在は単に「前室」(Anté-chapelle) と呼ばれるベイで、南壁に付けられた半円形壁アーチの内側の高い位置に、隅切りされたロマネスク様式の窓が、そして西壁には近代のものであるが、大きな半円頭形の窓が縦に 2 つ並べで開けられている。またこのベイの南壁の下には近代になって作られた石造りの祭壇が組み込まれている。16-17 世紀のブリカード (Bricard) 家に捧げられたものである。その時代のマルセイユの有力家系であったと思われる。

なおマルセイユは教区としては歴史的には 18 世紀までは司教区 (diocèse) であり、エクス大司教区のもとにあったが、1801 年にいったん廃止され、その後 1822 年に再建された後、1948 年に大司教区 (archidiocèse) に昇格した。

現在、「ラ・マジョール」すなわちマルセイユのノートル＝ダム＝ラ＝マジョール旧大聖堂 (La Vieille Major) は一般公開されておらず、内部にアクセスすることはできない。その代わり聖堂内部の様子は、INRAP (L'Institut national de recherches archéologiques préventives) のウェブサイトでバーチャル形式で見ることができる。

「ラ・マジョール」または現在の大聖堂から直線距離にしておよそ 800 メートル北西のマラヴァル通りに 2003 年から大きな駐車場建設工事が始まり、その敷地から初期キリスト教時代にあたる 5 世紀の埋葬用バジリカ聖堂の遺構が見つかった。その場所は古代後期のマルセイユの城壁のすぐ外側に位置する。7 世紀には早くも放棄されたようである。当時の名称は不明であるので、現在の通り名から「リユー・マラバル・バジリカ聖堂」(Basilique du rue Malaval) と呼ばれる。単身廊形式で半円形後陣が付く東西長 35 メートル、南北幅 18 メートルの聖堂で、聖堂の内外、特に内陣から聖堂の北側にかけての場所から 200 以上の墓 (遺骸) が発掘された。主祭壇はおよそ 6 世紀以降のもので、さらに装飾の施された大理石製の囲み構造物が特徴的である。この後者については、聖油を流し込んでそれを外に排出する穴も作られており、聖人崇拜の痕跡ではないかと認められるものである。このバジリカは、今も触れたように大きな駐車場建設のために、現在は完全に消滅している。

Bibliographie :

カエサル (1996) 45-114 頁; ストラボン (1994) 307-312 頁; 佐藤 (1995) 172-174 頁; 瀬原 (2011) 411-421 頁; 奈良澤 (2011) 107-128 頁; 深沢克己 (2002) 137-155 頁、234-360 頁; 深沢克己 (2017) 16-71 頁; Aghulon et Coule (2007) pp.6-21, pp.23-29, pp.32-36, pp.45-47, p.53, pp.133-135; Amargier (1995) pp.61-77; Aubert et al. (1961) pp.395-404; Baratier, dir. (1969) pp.35-49, pp.51-59, p.81; Baratier (1990) pp.46-60; Benoit (1933a) pp.157-172; Benoit (1936) pp.78-98; Biarne, et al. (1986) pp.121-133; Bizot, et al. (2009) pp.40-49; Blanc-Bijon et Paon (2011) pp. 135-156; Bouiron (2001) pp.255-276; Bouiron et al. (2023) pp.226-233; Bromwich (1993) pp.168-177; Busquet (1954) pp.67-74; CAG, 13/3, pp.453-463; Clébert (1966) t.1, pp.157-176, t.2, pp.13-76, pp.125-136, t.3, pp.121-123; Eydoux (1980) pp.287-307; Grosson (1773) pp.167-171; Février (1964) pp.122-124, Fig.4, Fig.23, Fig.43; Guyon (1995) pp.142-146; Moliner (2006) pp.131-136; Paone et Bouiron (2001) pp.225-234; Porter (1923) pp.267-269, p.289; Rouquette (1980) pp.407-433; Roustau (1905) pp.11-

16, pp.35-63; Vallery-Radot (1938) pp.73-80; GV; RIP.

WS : « Inrap, Une visite virtuelle de la Vieille Major, l'ancienne cathédrale de Marseille »

13.1.1b マルセイユ／サン＝ヴィクトール修道院 (Abbaye Saint-Victor, Marseille)

マルセイユの旧港のすぐ南に位置するこの修道院は、ヨハネ・カッシアヌスが 5 世紀初め頃に創建したとされる。同じく南フランスの、さらにイタリアに近いカンヌの沖のレランス修道院とともにフランスで最も古い歴史を持つものの 1 つである。創建者やその弟子たちの活動とともに、南ガリアとりわけプロヴァンスを中心にしていくつもの分院を保有し、中世の間その名声はやはりレランスとともに全ガリアに響き渡っていた。

創建者であるカッシアヌスは 360 年頃に黒海西岸（一説にはスキタイ地方）で生まれ、ベツレヘムでの修行の後、エジプトでも 15 年もの間研鑽を積み、404 年にローマで司祭に叙階された。マルセイユにやって来たのは 5 世紀初頭（415 年頃またはそれ以前）のことで、この地に男子と女子のための修道院をそれぞれ創建した。前者はラシドン（旧港）の南のサン＝ヴィクトール修道院で、後者はラシドンをはさんで反対側の大聖堂のすぐ南のサン＝ソヴール女子修道院（現存せず）であった。カッシアヌスは東方の共住修道制を西方へ導入した者として知られる。著作は『共住修道院の諸制度と 8 つの罪源の治療』や『教父たちの会談』で、彼の弟子たちはサン＝ヴィクトールにおいて半ペラギウス主義に基づく自由意志論を展開した。別名「マルセイユ派」とも呼ばれる。カッシアヌス自身は、435 年頃にマルセイユで没した（なお創建者がカッシアヌスであるということについては近年議論になっている）。

サン＝ヴィクトール修道院が創建されたのはラシドンのすぐ南側で、この場所は古代には墓地が広がっており、数多くのキリスト教徒たちの墓に混じって、ヴィクトールの墓もあったと伝えられる。ヴィクトールはマルセイユ出身のローマ軍の騎兵で、元老院議員の家系の出身である。マクシミアヌス帝（在位 286-305 年）が政争によってマルセイユ（マッシリア）に避難し籠城していた際に、キリスト教徒であったために異教の神に対する儀式を拒み、さらに皇帝に対して不敬であったこともあって、303 年（または 304 年頃）に拷問を受けて処刑された。その後マルセイユの守護聖人となる。カッシアヌスが 5 世紀初めに最初にこの地に創建した最も古い修道院の建物は何も残っていない。その後 5 世紀の間に修道院の建物とバジリカ聖堂が再建された。現在の地下クリプトはその時のものである。

5 世紀以降、サン＝ヴィクトール修道院には、この殉教者を崇敬する巡礼が数多く訪れることになる。トゥールのグレゴリウスは『殉教者の栄光』(La Gloire des martyrs) の中で、この殉教者の埋葬地にバジリカ聖堂があって巡礼者たち（とりわけ病の治癒を願う者たち）を集めていると記している。しかし 8 世紀になるとマルセイユはイスラームの艦隊による略奪にさらされる。司教もサン＝ヴィクトールに避難してくる状況であったが（その後、司教はさらにアルルに逃避した）。サン＝ヴィクトール自体も大きな被害を受け 9 世紀には修道院はいったん放棄された。10 世紀に入ってようやくイスラームの脅威が減じると、再建が進められた。

その後サン＝ヴィクトール修道院長は、マルセイユ副伯、マルセイユ司教とともに、都市マル

セイユに対して領主権を行使するようになる。また同じ世紀の 977 年、司教ホノラトゥス（在位 948-978 年、マルセイユ副伯の家系）がサン＝ヴィクトール修道院にベネディクトゥスの戒律を導入した。これ以降、サン＝ヴィクトールはよりいっそう活発な復興を遂げ始める。1005 年には、司教ポンス 1 世がサン＝ヴィクトールの自治を承認している。11 世紀前半には、修道院長ヴィフレッド（Wilfred／1005-1020 年頃）およびイザーンまたはイザルン（Isarn／在位 1020 頃・1047 年頃）のもとでめざましい興隆を見る。ラシドンの南岸全体の土地を所有し、マルセイユの街に対しては徴税権など世俗のマルセイユ副伯顔負けの封建的諸権力を行使した。またプロヴァンスのみならず、ラングドックやピレネー、カタルーニャ、そしてイタリアまで数多くの分院を保有した。その分量の多さで知られるサン＝ヴィクトール所有のカルチュレール（文書集）は、まさにそうした勢力の証となっている。なおその頃のマルセイユ本院には 60 名以上の修道士がいたという。

12 世紀以降、修道院の建物の改築・増築が進められた。南北方向を向いていた古いバジリカは完全に取り壊され、地下クリプトの上に、今度は東西方向に向けてロマネスク様式のバジリカ聖堂（上部教会）が新たに建設された。13 世紀には聖具室係ユグ・ドゥ・グラジニス（Hugues de Glazinis）の主導によってゴシック様式で改築が行われ、さらに 14 世紀には教皇ウルバヌス 5 世（在位 1362-1370 年、教皇就任以前はサン＝ヴィクトール修道院長であった）がサン＝ヴィクトールの要塞化を進めた。聖堂北側の 2 つの塔が建設され、後陣があたかも城塞のような外観を持つものに作り替えられたのもこの時期である。時は百年戦争による騒乱期であった。

その後、修道士たちの規律の弛緩と放蕩などもあって、サン＝ヴィクトールは 1738 年、教皇クレメンス 12 世（在位 1730-1740 年）によって世俗化（聖別解除）された。1755 年（文献によっては 1751 年）、ルイ 15 世はサン＝ヴィクトール教会を聖堂参事会管理下に置いた。大革命はサン＝ヴィクトールに大きな被害を与え、聖堂の南北にあった修道士居館や修道院長の館、また聖堂の南側にあったクロワトル（方形の内庭回廊）が完全に破壊されて消滅した。クロワトルには見事な柱頭彫刻を持つ柱が並んでいたがこれもまた失われた。聖堂自体も部分的に破壊されたが、監獄や飼料倉庫として使用された後、1802 年にエクス大司教区に復帰、翌年には祭儀が復活したのであった。

現在のサン＝ヴィクトール修道院は、旧港の南岸から約 300 メートルのところの、港からさらに南に入り込んだ小さなヨットハーバーのすぐ南側の場所に建っている。上部教会と地下クリプトの上下 2 つの層からなる。西隣には、17 世紀に建造されたヴォーバン様式のサン＝ニコラ要塞がその偉容を見せている。サン＝ヴィクトールは、2 つの大きな方形の塔や後陣部に並ぶ強力な扶壁、そしてそれらの塔や扶壁の上に並べられた四角いメルロンの列など、外観はキリス



13.1.1b サン＝ヴィクトール修道院

ト教の聖堂建築と言うよりは、まるで城塞建築のようである。先にも触れたように、この場所には古代後期から中世初期までは墓地が広がっていた。殉教者の墓が作られていた岩場の洞窟を利用して、5 世紀前半にカッシアヌスによって最初にバジリカ聖堂が建てられた。8 世紀以降のイスラームによる破壊の後、南北方向を向いていた古いバジリカを、12 世紀になって東西方向に変えてロマネスク教会の聖堂が新たに建設された。13 世紀以降も改修の手が加えられるが、全体的に城塞のような外観をサン=ヴィクトールに与えたのは教皇ウルバヌス 5 世の時のことである。

港のある南側からサン=ヴィクトールにアクセスすると、真っ先に目に入るのは今も触れた要塞化された 2 つの大きな方形の塔である。向かって右側（つまり西側）が「イザーン（イザルン）の塔」(Tour d'Isarn) と呼ばれ、左側（東側）が「ウルバヌスの塔」(Tour d'Urbain V) である。前者は土台部分が 11 世紀にまでさかのぼる。また上半分がボサージュによる壁面となっている。後者はドンジョン（主塔）とも呼ばれ、その位置は上部教会の北側トランセプトにあたる。2 つの塔とも、上部には尖頭形で縦長の鐘を吊るすためのベイが開けられている（南北面には 2 つずつ、東西面には 1 つずつ。ただしウルバヌスの塔の上部南面は壁面自体が取り除かれている）。また両者ともに塔頂部にはメルロンが並ぶ。

西ファサードの壁面は、そこに建てられていた旧修道院の建物が取り除かれた時の断面のままである。主身廊と南北の側廊部分の上部には大きな窓が開けられ、主身廊部ではその窓の下に半円頭形で縦長のロマネスク様式の窓が 2 つ並ぶ（ただし今は埋められている）。北側側廊の下部には半円形アーキヴォルトが架かる扉口が付けられている。これは近代になってからのものである。

この西ファサードから南側に回ると、そこはかつてのクロワトル（内庭回廊）の跡となる。聖堂南側壁面にはこのクロワトルを取り囲んでいたアーチ列の名残が見られる。またクロワトルと聖堂を行き来するための出入口およびその上のアーキヴォルトと、その横にそれとほぼ同じ大きさのニッチの半円形アーチが残されている。このクロワトルに並んでいた列柱の柱頭彫刻は、現在はそのほとんどが失われているが、18 世紀後半に Jean-Baptiste Grosson によって描かれたデッサンが残されている。そこには、アカンサスの葉飾りやゼンマイのように渦を巻く植物文様以外に、いろいろなポーズを取る人物たち、立ち並ぶサルのような生き物、ライオンやヒョウなどの四足獣、上半身が人間で下半身が四足獣（ケンタウロスか）などが描かれている。

教皇ウルバヌス 5 世による要塞化が生み出したサン=ヴィクトール上部教会の後陣は、厚さ 3 メートル以上ある外壁に、同じくらの厚さと張り出しが約 4 メートルという強力な扶壁が放射状に 4 つ付けられている。後陣外壁および扶壁の頂部には 2 つの塔と同様にメルロンが並ぶ。また扶壁と扶壁の間の後陣壁面には下に半円頭形の縦長の窓が開き、その上には細長い銃眼が付けられている。こうした後陣の外観だけを目にすると、それはまさしく城塞なのであって、とても聖堂建築には見えない。実際、14 世紀以降サン=ヴィクトールは、港の南側にまで拡張するマルセイユの街の城壁の一部として機能した。その防御的役割は、1660 年になってルイ 14 世がさらに西側にサン=ニコラ要塞を建設するまで続いた。

サン＝ヴィクトールの上部教会（Église supérieur／Église haute）の中には、11 世紀にまでさかのぼるイザーン（イザルン）の塔の下に作られた扉口（近代のもの）から入る。この扉口の上には、まるで聖ゲルギオス（Saint-George）のように馬に乗ってドラゴンを退治する聖ヴィクトールの姿を彫刻した石版がはめ込まれている。中に入ると、この塔の下は身廊部に入る前のポーチとなっており、天井は四角くて力強い 4 分交差リブ・ヴォールトである（キーストーンはない）。このポーチには 4 世紀終わりから 5 世紀初め頃の初期キリスト教時代の「**十字架とストリジルの石棺**」（Sarcophage à décor de croix et de strigile）が置かれている。20 世紀半ばのイザーンの塔の床面修復工事の際に見つかったものである。長さ 2.20 メートル、高さ 0.52 メートルで、前面中央に十字架があり、その両側にきれいに並ぶストリジル（strigile／S 字形に湾曲した溝浮彫り装飾）が彫刻されている。



13.1.1b 十字架とストリジルの石棺

このポーチから南に向けて聖堂内部に入ると、13 世紀のユグ・ドゥ・グラジニスの改築によるゴシック様式の上部教会の身廊となる。主身廊と南北の側廊からなる 3 廊式である。交差部より西の身廊部は 4 ベイからなり、その東西長は約 29 メートル、側廊を含めた南北幅は約 17 メートルである。そのうち主身廊の南北幅は約 8 メートルで、側廊の南北幅はそれよりも短い 4.5 メートルである。主身廊の天井はリブのない尖頭形のトンネル・ヴォールトで、その頂部までの高さは約 16 メートルである。ヴォールトの起拱点に水平に延びるコーニスがあり、そのコーニスの高さまで立ち上がるピア（方形柱と円柱が組み合わされた束ね柱）が、植物装飾が彫刻された柱頭を介して、ベイを区切る二重の尖頭形横断アーチを受け止めている。側廊の各ベイには 4 分交差リブ・ヴォールトが架けられている。角部を面取り（隅切り）した方形のリブである。主身廊と側廊の間は二重になった尖頭アーチが並ぶアーケードとなっており、側廊の各ベイを区切るのも、やはり二重になった尖頭形の横断アーチである。主身廊の西端第 1 ベイには 1840 年に製作された大オルガンが据えられている。

南側の側廊第 3 ベイには 5 世紀半ばあるいは後半頃の「**アブラハムの石棺**」（Sarcophage d'Abraham）が置かれている。別名「**死せる乙女の石棺**」（Sarcophage de la jeune morte）あるいは「**律法伝授の石棺**」（sarcophage de la Traditio Legis）などとも呼ばれる。1970 年に行われた主身廊の修復工事の際に 1 本の柱の基礎部分から無傷のままで発見されたもので、長さ

1.93メートル、高さ0.58メートルである。中に納められていた遺体は身長1.5メートルの20歳の若い女性で、金の刺繍が施された白い布の衣をまとい、額には金の小さな十字架が載せられていた。頭には花飾りの冠がかぶせられ、それ以外にも体の部分に花飾りが置かれていた。またこの女性の右足にはポリオの痕跡があったという。石棺のフタは切妻形で、斜面の前面はテグラ（四角い瓦板）が組み合わされた屋根の形をしている。石棺本体の前面の向かって左端は「アブラハムの犠牲」である。アブラハムは一人息子であるイサクにナイフを振るおうとしているが、天から差し出された神の手がそれを引き止めている。ナイフを振り上げるアブラハムの右手の下には雄羊がいて、彼の外套を口でくわえて押しとどめようとしている。石棺中央のテーマは「キリストの変容」で、山の上に立つキリストの向かって右側にはペトロ、左側にはパウロがいる。右側がモーゼ、左側がエリヤであるとする見方もある（この場面は、地下クリプトにある「聖ウルスラの石棺」を思い起こさせるものである）。さらに右側には、盲人の目に指を当ててそれを治癒するキリストがいる。このキリストには髭がない。盲人は右手に杖を持ち左手を腰に当てている。石棺の向かって右側の側面には、2本の柱の間のテントが開かれ、その中央にはランプが吊るされている。このランプは、前面の盲人の治癒とともに、キリストが世界に光をもたらす存在であることを表現しているのであろう。柱の左右両側にはそのランプに向けて進む2羽の鳥がいる。その下には菱形の連続する格子文様が線刻されている。石棺の反対側の側面には、2匹の子羊が左右から中央にいる3匹目の子羊に向かって歩いている。中央の子羊の頭には小さな十字架が載せられている。



13.1.1b アブラハムの石棺／死せる乙女の石棺

トランセプト（翼廊）から東は、ウルバヌス5世による14世紀の改修・再建による。トランセプトは南北が約24メートルあり、交差部も含めて3つのベイともに天井は交差リブ・ヴォールトである。交差部を取り囲む4つのアーチのうち南北と西側のものは、半円筒形のモールディングを伴った三重の尖頭形アーチである。またこのトランセプトには、南北それぞれの東壁に付けられたニッチの中に聖遺物のコレクションが展示されている。北にはカシヤヌスのものとされる聖遺物、南にはヴィクトールのものとされる聖遺物が置かれている。

交差部の東には3メートル弱の幅のある尖頭形の凱旋アーチが架けられ、さらにその東には短めの内陣（交差リブ・ヴォールトが架かる）が続く。内陣の北壁には尖頭形の大きなニッチ

の中に、サン＝ヴィクトール出身の教皇ウルバヌス 5 世の墓碑（横臥像の一部）が置かれている。彼は 1370 年にアヴィニョンで没し、初めはアヴィニョンのノートル＝ダム＝デ＝ドーム大聖堂に埋葬されたが、1372 年になって、かつて彼が院長であったマルセイユのサン＝ヴィクトールに改葬された。しかしサン＝ヴィクトールに作られていたゴシック・フランボワイヤン様式の立派な墓は大革命の際に失われてしまった。



13.1.1b 上部教会、身廊と後陣

聖堂東端の後陣は 6 本のリブによって区切られた五角形である。このリブは、半円筒形のモールディングが組み合わされたもので、コンソールを介してそのままピラストルとなって床まで下りる。リブが集まる丸いキーストーンには馬に乗った聖ヴィクトールが彫刻されている。後陣を構成する 5 つの面にはそれぞれ内部に向けて非常に大きく隅切りされた窓が開けられているが、そのうち北面のものは小さく、南面のものは埋められてしまっている。内陣と後陣を合わせて、その東西長は 13 メートルである。

上部教会には第 1 ベイと第 2 ベイの北側（イザーンの塔の西側）に、「サン＝サクルマン礼拝室」（Chapelle de Saint-Sacrement）がある。ここには 5 世紀頃の「初期キリスト教時代の祭壇」（Autel paléochrétien de Saint-Victor）が置かれている。もともとは地下クリプトに置かれていたものであるが、現在は基壇の上に据えられてこの礼拝室の祭壇として利用されている。この祭壇石の前面（長さ 1.78 メートル、上下幅約 0.14 メートル）には、中央にクリスム（円環の中にギリシア語のカイとローが交差し、その両側にアルファとオメガが置かれている）があり、左右からそれぞれ 6 羽の鳩がそのクリスムに向けて歩む。ただし向かって右端の 2 羽は失われている。反対側の面では、やはり左右からそれぞれ 6 頭の羊が、中央にいる 13 頭目の子羊に向けて歩みを進める。側面（南面）は、ぶどうの実のなる蔓が中央の花瓶から左右に広がる構図である。ぶどうの蔓のランソー（唐草文様）は、祭壇石の上面の枠部分にも彫刻されている。J. M. Rouquette によれば、この祭壇石はプロヴァンスに現存する一連の重要な祭壇石（祭壇テーブル）の中でも最も美しいものであるという。



13.1.1b 初期キリスト教時代の祭壇

サン=ヴィクトール修道院の地下クリプトへは、上部教会の身廊第1ベイの階段から下りる。南北およそ 36 メートル、東西およそ 26 メートルの地下空間が広がっている。その南側は、5 世紀の初期キリスト教時代の埋葬地に南北方向に作られていた古いバジリカ聖堂の聖域にあたる。ロマネスク期に上部教会が建設された際に地下クリプトとなった。カタコンベや洞窟、アトリウム（5 世紀）、そしていくつもの古い礼拝室に、さらに 12 世紀のロマネスク期以降の礼拝室や聖具室が加えられて、複雑な複合空間となっている。またこのクリプトには、4 世紀から 5 世紀の初期キリスト教時代のものを中心に、古代からロマネスク期、そしてゴシック期に至る数多くの石棺や碑文などが置かれ、それはさながら小さな碑文博物館といった体をなしている。以下では、それらのうち主なもののみを取り上げる。

上部教会から階段を下りたところは 13 世紀の「サン=モーロン礼拝室」（Chapelle Saint-Mauront）で、正面のニッチには「ユリア・クインティナーの石棺」（Sarcophage de Julia Quintina）が置かれている。長さ 2.25 メートル、高さ 0.59 メートルの白大理石製である。もとは 2 世紀のものであるが、7 世紀終わりに、マルセイユ司教聖モーロンを埋葬するために再利用された。中央には円形の碑銘があり、シュロを手にした二人の勝利の女神がそれを支えている。またその左右両側にはケンタウロスが 2 頭ずついて、左右それぞれ両端のケンタウロスの背中にはキューピッドが乗っている。



13.1.1b ユリア・クインティナーの石棺

この礼拝室の西壁には、2 つの石棺が並べて置かれている。奥（向かって左側のもの）は「**聖モーリスの石棺**」（Sarcophage de Saint Maurice）である。4 世紀終わり頃のもので、長さ 2.24 メートル、高さ 0.57 メートルある。石棺前面にはコリント様式のねじり柱に支えられた 7 つのアーチが連なり、それらのアーチの下には中央に髭のないキリストが巻物を手にして座り、その両側にはやはり巻物などを手にした十二使徒が左右に 6 人ずつ分かれて座る。キリストの足下には小さな子羊が頭を上げてキリストを見上げている。この石棺は、もともとは誰の墓かは不明であるが、後に聖モーリスの聖遺物を納めるために使われたという。聖モーリス（聖マウリティウス）は、伝承によれば 3 世紀終わり（または 4 世紀初め頃）にエジプトのテーベで集められたキリスト教徒からなる軍団の指揮官で、ガリア（スイスのジュネーヴ近く）の同じキリスト教徒を殺すことを拒んだことで、あるいは異教崇拝を拒んだことで、皇帝マクシミアヌスの命令によって全員が処刑されたという（テーベ軍団の殉教）。



13.1.1b 聖モーリスの石棺

その隣（向かって右側のもの）は「**聖モーリスの仲間たちの石棺**」（Sarcophage des Compagnons de Saint Maurice）で、やはり 4 世紀終わり頃のものである。長さ 2.10 メートル、高さ 0.60 メートルのカラーラ産大理石で作られており、かつては聖モーリスとともに殉教した聖人たちの聖遺物が納められていたものである。実際の埋葬者については分からない。石棺前面は、コリント様式のねじり柱に支えられた 4 つのアーチが左右に並び、5 つの区画に分かれる。中央は上部が凹型になった水平のエンタブラチュアになっていて、その下にはひとときわ高い位置にキリストが座り、左右の使徒（ペトロとパウロか）に教えを説いている。さらにキリストの足下の左右には一組の夫婦がひざまずいてキリストの足に触れている。石棺はこの夫婦のものであったのではないかと考えられる。石棺の左端の区画にはパウロの前に現れたキリスト（髭はない）、さらにその右隣はリストラの街で石打ちにされたパウロである。反対側の 2 つの区画のうち、左側は逮捕されるキリスト、右側は手を洗うために水差しを持ってこさせるピラトである。



13.1.1b 聖モーリスの仲間たちの石棺

サン＝モーロン礼拝室の北の端の奥には 4 世紀終わり頃の「**7 人の眠り聖人のうちの 4 人の石棺断片**」（Fragment des quatre des sept dormants）が置かれている。「7 人の眠り聖人」とは 3 世紀のエフェソスにおいてローマ皇帝デキウスによる迫害を受けて洞窟に避難して長いこと（『黄金伝説』によれば 377 年間）眠りについたとされる 7 人の聖人のことで、十字軍によってそのうちの 4 人の遺骨がフランスのサン＝ヴィクトール修道院にもたらされたという。修

道士たちは古い墓地から石棺を運び込み、その中に 4 人の遺骨を納めたのであった。クリプトにあるこの石棺の断片（長さ 0.91 メートル、高さ 0.65 メートル）には、城門に向かう 5 人の使途の行列の彫刻が残されている。もとは山の上でペトロに律法を与えるキリストが中央にいて、それを十二使徒が囲んでいたものと思われる。

サン＝モーロン礼拝室の東側は「イザーンの礼拝室」(Chapelle d'Isarn) である。ここの西壁のニッチには有名な「イザーンの墓石」(Pierre tombale d'Isarn) が置かれている。イザーン修道院長が 1047 年に没した後ほどなくして、古代の石棺（4 世紀）の底部を再利用して作られたものである。その大きさは長さ 1.78 メートル、幅 0.60 メートル、厚さ 0.15 メートルで、中央に横長に延びる長方形の盤面に、8 行（最上部の薄くなった小さな文字列を含めると 9 行）に渡って、この修道院長をたたえる美しい碑銘が刻まれている（文頭には小さくて丸いクリスムが刻まれている）。中央の 2 行がその他の行よりも大きな文字となっている。この長方形の盤面の両端の外側は、やはり碑銘が刻まれた半円形の円環となっており、上（向かって左側）の円環の中には、イザーンの肩から上の頭部と牧杖の先端が、また下（向かって右側）の円環の中にはローブの裾とそこから延びる両足がリアルに彫刻されている。イザーンの頭は縦長で、まるでヘルメットのようなカールした髪の下に、閉じた目と大きな鼻、しなやかな唇、引き締まった顎、高い位置の両耳などが表現されている。表情はどちらかと言うと厳めしい仏頂面である。かつてアンリ・フォションはこの墓石について、「蛮族的な荒々しさと威風をそなえたむき出しの顔が彫られた」もので、そこには「コプト芸術のモデルの影響が顕れている」と述べている。



13.1.1b イザーンの墓石

イザーンの礼拝室の天井に架けられた二重になった太い横断アーチには、東側でそれを受け止めるピア柱の西側のアーチ起拱点のところに、13 世紀の「建設する修道士たちのフレスコ画」(Fresque des moines bâtisseurs/Scène de chantier de construction) の一部が残されている。背景は赤で、全部で 5 人の人物が建設現場で働いている様子が描かれている。この 5 人は修道士であるとされるが、これは必ずしも確かなことではない。

イザーンの礼拝室は、中央にある二重になった半円アーチが 2 つ連なるアーケードとピア柱が南北方向に並んでいるが、そのさらに東側には、北にあるサン＝タンダレ礼拝室と告解の聖母（ノートル＝ダム＝ドゥ＝コンフェッション）礼拝室の間をつなぐ廊室（側廊）がある。現在は信者席が設けられている場所である。その東壁の一番北の半円頭形のニッチの中には 13 世紀中頃の「ユーク＝ドゥ＝グラジニスの墓碑銘板」(Épitaphe d'Hugues de Glazinis) がある。高さ 0.48 メートル、幅 0.42 メートルの白い大理石製である。ユーク＝ドゥ＝グラジニスはサン＝ヴィクトールの聖具室係であったが、先にも触れたように 13 世紀にサン＝ヴィクトールの上部教会の主に身廊部分をゴシック様式で再建する工事を主導し、1250 年に没した。墓碑の刻まれ



13.1.1b ユーク＝ドゥ＝グラジニスの墓碑銘版

た銘板は右下の角部分が破損して失われている。銘板の上 3 分の 2 は彼を讃える碑銘文字列で、各行頭には丸いロザス装飾が付けられている。下 3 分の 1 には、左から双塔の聖堂、中央には太陽と月を伴い 2 つの燭台の間に立つマルタ十字、そして右端には祭壇で両手を上げて祈りを捧げる祭服を着た司祭がいる。この碑銘版の下はユーク＝ドゥ＝グラジニスの墓であるが、大革命の際に荒らされて今は何も残っていない。

イザーンの礼拝室東壁の中央には 5 世紀前半の「聖ウルスラの仲間たちの石棺」(Sarcophage

des compagnes de Sainte Ursule) が置かれている。カラーラ産の大理石で作られた石棺の本体およびその上の蓋から構成される。本体は長さ 1.86 メートル、高さ 0.43 メートルで、蓋は長さ 1.85 メートル、高さ 26 センチである。4 世紀に生きた聖ウルスラは「ケルンのウルスラ」とも呼ばれ、伝説によれば、彼女はブルトン人（ブルターニュのケルト人あるいはイングランドのブリトン人）の王女で、11 人（あるいは一説には 1 万 1 千人）の処女とともにローマへの巡礼の後、ケルンに立ち寄った際にフン族に捕らわれて全員が殉教したという。この墓は聖ウルスラと共に殉教した二人の処女の墓とされるが、実際にはこの石棺に誰の遺骸が納められていたのかは不明である。石棺本体は 7 つのアーチ（ただし中央は二連アーチ）によって 7 つの場面に区分けされる。中央には、二連アーチを受ける柱の代わりにキリストが 4 つの川が流れる山の上に立つ。その頭には冠が載せられ、頭の後ろには光輪が輝く。キリストの両側には向かって左側にパウロ、右側には十字架を持ちキリストから律法を受け取るペトロがいる。さらにその左右両側にはアーチの下に使徒たちが並んでいる。蓋の左側は、樂園を思わせる光景で、子羊が立つ小山から流れ出る泉の水を 2 頭の雄鹿が飲んでいる。蓋の中央には、円環の中に納められたクリスマが置かれ、その両側にはイルカがいる。さらにそのクリスマの下には、長方形のカルトゥーシュ（碑銘板。ただし銘文はない）があり、それを左右両側で天使が支え



13.1.1b 聖ウルスラの仲間たちの石棺

持っている。天使やイルカは故人の魂を天上界や樂園に運ぶ役割を果たすものである。蓋の右側は破損により部分的に失われているが、「カナの婚礼の奇跡」(ヨハネ福音書 2:1-11)、そして一番端が約束の地を告げる「カナンのブドウの房」(民数記 13)である。石棺蓋に刻まれたこうした描写は、聖餐における水とぶどう酒の結びつきを表している。

イザーンの礼拝室東壁の南側のニッチには 4 世紀初め頃の「**聖エウゼビアの石棺**」(Sarcophage de Sainte Eusébie) が置かれ、その上に 6 世紀の碑銘版 (Épitaphe) が掲げられている。石棺は長さ 2.05 メートル、高さ 0.54 メートルで、カラーラ産の大理石で作られている。その前面には中央のメダイオン (円環／クリペウス) の中に、埋葬された故人の上半身像が彫刻されている。この人物はトーガとラティクラベ (肩帯) を身にまとい、4 世紀の元老院議員階級のローマ人と思われる。そのメダイオンの下には「ヨナと大魚」が表されている (ヨナ書 2:1-11)。死と復活を暗示するものである。ヨナは裸で横たわり、大魚はまるで怪獣のような姿をしている。中央のメダイオンの左右両側には優美なストリジル装飾が彫刻されている。石棺の左端にはモーセがいる。「岩から水を湧き出させるモーセ」のエピソードで、モーセはホレブの岩を杖で叩いて水を湧かせ、それをイスラエルの人と思われる二人の人間が飲んでいる (出エジプト記 17:1-7 / 民数記 20:1-13)。石棺の右端にもモーセがいて、シナイ山で律法を受け取っている (出エジプト記 24:12-18)。この石棺は、女子修道院長であったとされる聖女エウゼビアのものとされてきたが、それがどこの修道院であったのかは不明である。石棺自体は 4 世紀のもので、8 世紀のイスラームの襲撃による犠牲者 (伝説によれば 40 人の修道女たちと共に殺された) というのはありそうにない。また石棺中央のメダイオンに表された人物は男性である。石棺の上に掲げられている碑銘版にはこの女子修道院長を讃える碑銘文が記されており、その下部には花瓶と 2 羽の孔雀が刻まれている。



13.1.1b 聖エウゼビアの石棺

イザーンの礼拝室の北側には広い「クリプトの旧聖具室」(Ancienne Sacristie des cryptes) があり、さながら碑文展示室となっている。

旧聖具室に入ってすぐ右側にあるのは「**ヴリュジアヌスとフォルテュナトゥスの墓碑**」(Épitaphe de Volusianus et Fortunatus) である。2 世紀あるいは 3 世紀のもので、もともとはラシドン南岸の埋葬地にあったものがサン＝ヴィクトールに移されたものである。18 世紀末

の聖具室の床板修理の際に発見されたが、破損していて一部が失われている。この墓碑は、かつてはガリアにおけるキリスト教徒の記録の最初期のものの1つで、ここに記された二人は火刑によって殉教したものとされていた。最近では墓碑の最後の部分に刻まれた錨の印などから、この二人は火刑による殉教者ではなく、海難事故で亡くなった船乗りであったのではないかとの見方が有力である。

この墓碑の左隣には「**栄光の玉座に座るキリストの石棺**」（Sarcophage du Christ trônant）がある。カシス（カシ）産の石材で作られており、長さ 2.07 メートル、高さ 0.44 メートルである。5 世紀中頃のものであるが、かなり破損が進んでおり、大きな断片が組み合わさって復元されている。2つのイオニア式の縦溝柱によって3つの区画に分かれる。中央には2人の天使に左右を支えられた円環の中に、栄光のキリストが座っている。左手には書物を持ち、右手で祝福を与えている。向かって左側の区画にはパウロ、右側の区画には十字架を担ぐペトロがいて中央のキリストを讃えている。



13.1.1b 栄光の玉座に座るキリストの石棺

旧聖具室の北側中央のニッチには 12 世紀の「**オランジュ家の紋章のある石棺**」（Sarcophage aux armes de la Maison d'Orange）が置かれている。長さ 2.01 メートル、高さ 0.65 メートルで、装飾はシンプルである。中央には十字架、その両側には紐で吊り下げられた同じ紋章が見られる。F. Benoit によれば、その紋章はオランジュ公家のものであるという。石棺の蓋にはペトリュス・アンドレアス（Petrus Andreas）という名が刻まれている。



13.1.1b オランジュ家の紋章のある石棺

旧聖具室北側の奥には 5 世紀中頃の「羊と鹿の石棺」(Sarcophage des brebis et des cerfs)がある。長さ 2.00 メートル、高さ 0.44 メートルの石棺本体とその上に載せられた長さ 2.00 メートル高さ 0.30 メートルの石棺蓋からなる。石棺本体は破損が進んでいて、中央部分と向かって左側部分は復元された線刻図 (F, Carli) が描かれている。その石棺中央には、2 本の太いヤシの木を背景にして、子羊 (キリスト) が 4 つの川が流れ出る小山の上に立っている。その左



13.1.1b 羊と鹿の石棺

右両側にはそれぞれ鹿がおり、小山から流れ出る清流を飲んでいる。石棺の左側は「カナの婚礼の奇跡」(イエスが甕の中の水をぶどう酒に変えた)、右側は「パンの増加の奇跡」(イエスが 5 つのパンと 2 匹の魚で 5000 人を満腹にさせた) で、ともに聖体拝領を意味している。石棺の蓋には、左右両端の門から出た 3 匹ずつの羊の列が、中央にあるキリストを表すキリスマに向けて歩みを進めている。これは先に触れた上層教会に置かれている初期キリスト教時代の祭壇の彫刻 (裏側) と類似している。なおこの「羊と鹿の石棺」の蓋では、羊たちの間にヤシの木が立ち並び、あたかも楽園のような雰囲気を醸し出している。左右の門はベツレヘムとエルサレムの町の門を表しているのであろう。

旧聖具室の南壁奥にあるのは 4 世紀終わり頃の「キリスト復活の石棺断片」(Fragment du sarcophage de l'Anastasis) である。長さ 1.25 メートル、高さ 0.45 メートルで、石棺前面を飾っていた 2 つのパネルの断片が組み合わされたものである (最初は左側だけ知られていたが、



13.1.1b キリスト復活の石棺断片

が、その後に右側が発見された）。柱頭付きのねじり円柱の上に架けられた 4 つのアーチと、その下に 3 人の使徒がいる。向かって右から 2 番目のアーチの下には、レムニスカス（冠帯）を戴く十字架が立ち、その両側に 2 人の兵士がうずくまっている。キリストの復活と勝利（アナスタシス）を表した場面である。左側の兵士の頭には鳥がいる。右側の兵士の上半身は失われている。この場面の両側にいてキリストの復活を讃えている使徒は、パウロ（左）とペトロ（右）である。パウロは頭髮が後退して禿げた額をしている。

旧聖具室の南壁中央には「**2 つのアクロテリオンで飾られた石棺蓋**」（Couvercle de sarcophage à acrotères）がある。「**高貴なるウジェニーの墓碑銘の石棺蓋**」（Couvercle de sarcophage portant l'építaphe de la « noble Eugénie »）とも呼ばれる。長さ 2.28 メートル、高さ 0.28 メートルの切妻形石棺蓋の両端に、人間の頭の彫刻されたアクロテリオン（切妻破風の上に据えられた彫刻装飾）がある。もとは古代の石棺であったが、5-6 世紀になって高貴な女性ウジェニーのために再利用された。彼女を讃える碑文が切妻前面に刻まれている。それによると、この女性はその時代にプロヴァンスを荒廃させたフランク族、ブルグント族、西ゴート族の間の戦争で捕虜となった人々の生活を支えるために自分の財産を使ったという。



13.1.1b 2 つのアクロテリオンで飾られた石棺蓋

旧聖具室の東側、すなわちイザーン礼拝室の北東角の奥には南北に長い「**サン＝タンダレの礼拝室**」（Chapelle Saint-André）がある。告解の聖母（ノートル＝ダム＝ドゥ＝コンフェッション）礼拝室から北へ向けた延長線上にある。サン＝タンダレ礼拝室は、現在は地下クリプトの一部であるが、ここは 5 世紀には屋外にあってバジリカ聖堂の南端にある聖域に入るための通路のような場所であった。現在は上部教会の「イザーンの塔」の真下にあたる。13 世紀にヴォールトが架けられた。かつてはここに聖アンデレの聖遺物（十字架の一部など）が置かれていたが、十字軍時代の略奪品であったようで、1980 年になってギリシアのパトラスにある聖アンデレ大聖堂に返還された。礼拝室の奥には近代の祭壇が置かれている。礼拝室の東側には初期キリスト教時代の墓地が発掘されている。

地下クリプトの最も古い部分は、その南側ゾーン（イザーン礼拝室の南側）を占める殉教者墓所「**マルティリウム**」（Martyrium）である。そこに置かれた黒い聖母子像から「**告解の聖母**（ノートル＝ダム＝ドゥ＝コンフェッション）礼拝室」（Chapelle Notre-Dame-de-Confession）とも呼ばれる。5 世紀の最初期のバジリカ聖堂時代に遡る場所で、南北約 5.5 メートルの身廊と、その東側には幅約 1.5 メートルの側廊が残っている（もともとは身廊の西側にも同様の側

廊があった)。「マルティリウム」の中央にはこの礼拝室の祭壇として使用されている「**聖カッシアヌスの石棺**」(Sarcophage de Saint Cassien)がある。長さ1.40メートル、高さ0.45メートルで、その大きさから5世紀前半頃の子供の石棺と思われる。17世紀頃までは、この修道院の創建者とされてきたヨハネス・カッシアヌスの聖遺物が中に納められていたという。石棺前面は、柱礎と冠板(柱頭)を持つ5つの無装飾のピラストルによって分けられた5つの区画が並ぶ(左端にはピラストルがない)。中央の区画には両腕を左右に広げたオランス(祈る人)がいる。その両側および右端の区画にはそれぞれ一人ずつ聖人らしき人物がおり、中央のオランスに向けて彼を讃えるようなポーズを取っている。左端の区画には小さな子供を神に差し出す両親がいる。子供を差し出すその父親(左から2人目)の腕にはベールがかけられている。母親と思われる左端の女性は頭から足まで全身がベールで包み込まれている。この子供が石棺に納められた故人であるなら、中央の区画の祈る若者は、その子が天上に召され聖人たちに迎えられ祝福されている様子を表しているのであろう。



13.1.1b 聖カッシアヌスの石棺

カッシアヌスの石棺の下には1960年代にF. Benoitが発掘した3世紀半ばの「**二重墓**」(tombes jumelles)がある。岩盤をくり抜いた墓穴が2つ並び、覆い板が被せられ、中にはそれぞれ遺骨が横たえられていた。F. Benoitは、この二人が先に触れた殉教者「ヴリュジアヌスとフォルテュナトゥス」であり、この墓の場所が初期キリスト教時代の聖域の中心であると推定した。しかしその後、この二人は殉教者ではなく、この場所も聖域からは外れていることが明らかになっている。

この礼拝室の名前にもなっている高さ約1メートルの黒い「**告解の聖母像**」(Statue de Notre-Dame-de-Confession)はクルミ材で作られた13世紀末頃の作品で、もとは華やかに彩色されていた(後ろ側に回るとくり抜かれたクルミの木の内側が見える)。今ではかなり色あせてはいるが、王冠を頭に載せた聖母のローブは濃い緑色で金色の星が散りばめられている。彼女が左膝の上に抱くイエスは金色の衣をまとい、左手に球体を持



13.1.1b 告解の聖母像

ち、右手で世界を祝福している。M. Fixot によれば、この聖母子座像は中世には福音書記者ルカの作品と信じられていたらしい。大革命期にはマルセイユ市職員によって隠されて（一説には買い取られて）いたが、1804 年にサン＝ヴィクトール修道院に返還されたのだという。

「マルティリウム」の南側は「アトリウム」(Atrium) または「正方形の部屋」(plan carré) と呼ばれる一辺が約 5 メートルの、文字通り正方形平面の地下空間である（ただし実際には東西の方が 6 メートルと少し長い）。ここは 5 世紀の初期キリスト教時代の古いバジリカにおける聖域であった。聖ヴィクトールの墓はこのあたりであったとも言われる。このアトリウムの各辺には合計で 9 本の高さのある円柱が配され、東西南の



13.1.1b アトリウム

3 つの辺においてはそれらの円柱がそれぞれ半円形の二重アーチを受け止めている。東西の 2 面では、二重アーチのさらにすぐ外側に、5 世紀のバジリカの側室であった部分との間に大きな半円アーチが架かる。南面では二重アーチの下に、さらに水平のコーニスをはえてニッチの半円アーチがやはり二重に付けられている。通常アトリウムとは、天井などで閉じられていない開放的な建築空間を指すが、サン＝ヴィクトールの場合も、このアトリウムは、現在は上部教会 1 階の南側側廊のさらに南に付けられた建物の天井（ヴォールト）まで、いわば非常に高さのある吹き抜け空間となっている。このアトリウムには、北東角の小さなアーチ（マルティリウムの東側の側廊の南端にあたる）の下側に、二条線のぶどうの蔓およびぶどうの実からなる組紐文様が彫刻されており、さらにその全体がねじり紐文様で縁取りされている。初期キリスト教時代のものかロマネスク期のものか、正確な制作年代は不明である。またアトリウムの北西角のアーチには、聖杯から左右両側に唐草文様が広がる色鮮やかなモザイクの断片が残されている。5 世紀頃のものである。なおアトリウムに配されている円柱は、19 世紀初めに県知事シャルル・フランソワ・ドラクロワによって撤去され、オリジナルのものとは別のものに置き換えられてしまった。

アトリウムの西側にはアルメニアの聖ブラシウスに捧げられた「サン＝ブレーズ礼拝室」(Chapelle Saint-Blaise) がある。そこにサン＝ローラン (Saint Laurent) すなわち聖ラウレンティウスを加えることもある。この部屋の南壁には、かつてはアトリウム南壁と同様に半円形の二重アーチが架けられていたが、13 世紀になってそのすぐ下にセグメンタル・アーチが加えられて礼拝室全体が整えられた。南奥にはブローケン・ペディメントを持つバロック様式の祭壇が据えられている。17-18 世紀にサン＝ヴィクトールの修道士や司祭を出したオスタジェ (Hostager) 家の紋章が彫刻されている。

サン＝ブレーズ礼拝室のすぐ北には、西側の壁の半円頭形ニッチに「聖クリュサントゥスと聖女ダリアの石棺」(Sarcophage des Saints Chrysante et Darie) が置かれている。カラーラ

産大理石で作られた 4 世紀末頃のもので、長さ約 2.10 メートル、高さ約 0.60 メートルある。石棺前面には、合計 6 本の樹木がまるでアーケードのように立ち並び、区画を 7 つに分けている。区画を分けるのが円柱ではなく樹木であるところが珍しい。これらの樹木は根元の部分が二又に分かれ、上部では葉を生い茂らせている。左右のそれぞれ 2 本の樹の上には鳥の巣が見える。また両端の樹ではヘビがその巣へ向けて幹を這い上っている。中央の区画はかなり破損しており、かつては円環に囲まれたクリスム（十字架）が小山に立てられた柱の上に置かれていた。いわば勝利のトロフィーとも言えるもので、キリスト復活（l'Anastasis）のシンボルである。そしてその小山から湧き出る泉の水を、左右両脇にいる鹿が飲んでいる。勝利を収めたキリストから生命の水を得る信者の姿を表しているのであろう。また鹿は初期キリスト教時代においては、しばしば洗礼と結びつけられる形象でもある。この中央の区画から向かって左へ向けてキリストを讃えるパウロの姿と、さらに彼の捕縛と斬首という受難の場面が続く。一方、反対側では向かって右に向けて、やはりキリストを讃えるペトロと、さらにキリストによって予告されるペトロの否認（ペトロの足下には鶏がいる）、そしてペトロの逮捕（あるいは兵士との対話）の場面が続く。この石棺の名前にもなっているクリュサントゥス（またはクリザントゥス）は、『黄金伝説』（150 章）によれば、ナルボンヌの貴族の息子で敬虔なキリスト教徒であった。彼の父親は息子に棄教を促すべく処女ダリアを使わすが、逆に彼女もまたキリスト教徒となった。二人は多くの人々を改心させた後、紀元 211 年（『黄金伝説』によれば 285 年）に殉教した。ただし実際に殉教したのはナルボンヌではなくローマにおいてであったようである。トゥールのグレゴリウスによれば、彼らの聖遺物は 6 世紀になってマルセイユに運ばれたのだという。なおこの石棺前面の向かって左から 2 番目の区画において、パウロを捕縛する兵士のすぐ後に、一人の女性が立っており、伝統的にはパウロの殉教に深く関わった聖女プラウティラ（Sainte Plautilla）とされてきたが、近年では彼女はこの石棺に納められていた故人なのではないかと指摘されている。



13.1.1b 聖クリュサントゥスと聖女ダリアの石棺

アトリウムの東側にあるのは「**聖エルメスと聖アドリアンの礼拝室**」（Chapelle Saints-Hermès-et -Adrien）である。アトリウムからはその東面の二重アーチとさらにその外側の大きな半円アーチによって隔てられている。地下クリプトに下りるための古い階段の下にあって、

平面プラン的にはアトリウムの東側の側廊の位置にあたる。

この礼拝室には、5 世紀半ばまたは 6 世紀初め頃の「**聖エルメスと聖アドリアンの石棺**」（Sarcophage des Saints Hermès et Adrien）がある。「**長方形のニッチの並ぶ石棺**」（Sarcophage à niches rectangulaires）とも呼ばれる。長さ約 1.60 メートル、高さ約 0.50 メートルで、地元のカシス（カシ）産の石材で作られている。石棺前面は 7 つの方形ピラストルによって 6 つの区画に分けられているが、向かって左端の区画が失われており、かつては 8 つのピラストルによって分けられた 7 つの区間から構成されていた。M. Fixot などは、墓を限られた空間に設置するために意図的に左端が削り取られ切り詰められたとしている。中央の区画は、基壇の上に立ちコリント式の柱頭を持つ縦筋入りのピラストルによって区切られている。中央の区画だけ上部にセグメンタル・アーチが架けられているが、それ以外の 5 つの区画は、天井部分も水平となった長方形のニッチである。中央の区画を除いて、他の区画を分けるピラストルには唐草文様が付けられているが、左右両端のピラストルおよび各区画の長方形の天井にあたる水平の縁には装飾はない。中央の区画には頭に光輪を付けられたキリストが左手に書物を持って、手すりの付いた椅子に座っている。その顔には髭はなく、髪が肩までかかっている。その向かって左側には右手を挙げてキリストを賛美するパウロ、右側には左手で祝福のポーズを取るペテロがいる。さらにその左右両側にいる使徒たちは、それぞれ巻物を持っている。キリストを通して神の言葉が彼らに伝えられたことを示しているのであろう。なお聖エルメスと聖アドリアンは、ともに 3 世紀末頃にマルセイユで殉教した人物とされるが、アフリカの殉教者なのではないかとも言われる。

「**聖ラザロ礼拝室**」（Chapelle Saint-Lazare）は、「聖エルメスと聖アドリアンの礼拝室」のすぐ北側、「マルティリウム」（または「告解の聖母礼拝室」）の東側にある。サン＝ヴィクトール修道院では、一般に最もよく知られる場所である。古代には石切場であった岩場をくり抜いて作られている。あたかも極めて古い洞窟礼拝室の様相を呈し、聖ヴィクトールや聖ラザロ、さらにはマグダラのマリアといったマルセイユにまつわるさまざまな人物たちの伝説がこの場所に凝縮されているかのような不思議な雰囲気醸し出している（ただしこれは M. Fixot らによれば、17 世紀アンシャンレジーム期に、意図的にそのような演出を考えて拡張工事が行われたものであるという）。

この礼拝室の入口（西側）には左右両側に小円柱が立ち、その上にセグメンタル・アーチが架けられており、その中央にはギリシア十字のモノグラム（クリスム）が刻まれた円環が付けられている。十字の横腕の下には、かなり破損しているがギリシア文字のアルファとオメガが刻まれている。このアーチを受けとめる左右の柱のうち、向かって左側のものは柱身がねじり文様となった円柱で、その柱頭は先端がきれいに渦を巻くアカンサス風の彫刻である。ただしこの柱の上半分は修復・再建されたものである。

向かって右側の円柱の柱頭部分には、右手に司教杖を持った一人の人物の顔が彫刻されている。11 世紀ロマネスク期あるいはプレ・ロマネスク期のものである。この人物は、マグダラのマリアやマルタたち姉妹などとともにプロヴァンスにやって来たと伝説が伝える聖ラザロ（イエスによって死から復活した）であるとも、5 世紀前半のエクス＝アン＝プロヴァンスの司教ラ



13.1.1b 聖ラザロ礼拝室



13.1.1b 聖ラザロ (?) の柱頭彫刻

ザロ（在位 v.408-v.411）であるとも言われる。あるいはマルセイユ司教としての聖ヴィクトールであったのではないかとする見解まで存在する（聖ヴィクトールの墓はこの場所だったとも言われる）。いずれもそれを確証する客観的な考古学的・歴史学的史料などがいないためにはっきりしたことは分らない。作られた時期が聖ラザロ崇拜復活の時期と重なっているのも、この人物が聖ラザロである可能性が最も大きい。いずれにしても、この柱頭にいる人物の表情はユニークである。丸くて大きな目（左右非対称で、眼球には小穴が開けられている）を見開き、長い鼻（その下半分は破損している）のかなり下に、「へ」の字形をした口が付けられている。また縦筋によって髭が表されている。髪形はまるで帽子のようで、左右の耳は丸くて小さく見える。

聖ラザロ礼拝室の奥（東側）には 19 世紀半ばの祭壇が置かれ、その上には保存状態のあまり良くない大きな祭壇パネルが据えられている。ピエール・ピュジェ派（17 世紀）の聖マグダラのマリアを描いた浅浮彫（1869 年）である。この祭壇の左側は、古代後期にまでさかのぼる埋葬室である。その低い天井を支えるのは 17 世紀に作られた四角くて太い方形柱（角柱）で、一番上の柱頭部分には髭を生やしたモーセの上半身像が置かれ、彼は左手に立法の板、右手には尖筆を持っている。柱の四隅はねじり紐文様のモールディングとなっている。柱の各面にはヘビやオリーブの樹が彫刻されている。このヘビは民数記（21:4-9）に登場する青銅の蛇であろうか。

このモーセの方形柱が支えるアルコソリウム（壁龕墓）には「**聖なる幼子殉教者たちの石棺**」（Sarcophage de Saints Innocents）が置かれている。長さ 1.30 メートル、高さ 0.33 メートルで、2-3 世紀頃に白大理石で作られた子供のための石棺である。サン＝ヴィクトールで 1628 年に発見された。ヘロデ王の命令で殺されたベツレヘムの 2 歳以下の幼児たち（マタイ福音書 2:6-17）を記念するものである。中世の間、この中に幼子たちの聖遺物が納められていたとも言われるが、確かなことではない。石棺前面は、キューピッドたちがマルスの武具を作る様子が彫刻されている。中央から向かってやや右側には、双子に乳を飲ませている雌狼が彫刻され

た円盤（あるいは盾）を 2 人のキューピッドが左右で掲げ持っている。円盤の下には正面を向いたスフィンクスらしき生き物がいる。石棺の左端では 2 人のキューピッドが台座の上の炉で盾を鍛造している。その下には完成した胸当てが置かれている。その右隣では 3 人のキューピッドがスネ当てを作っている。また石棺の右端ではやはり 3 人のキューピッドが兜を作っている。



13.1.1b 聖なる幼子殉教者たちの石棺

最後に、M. Fixot らによると、サン＝ヴィクトール修道院の地下クリプトからマルセイユ旧港（ラシドン）の下をくぐって港の北側にまで地下トンネルのようなものが通じていたという言い伝えが、19 世紀頃までまことしやかに語り継がれていた。一説によると旧港北側の出口はラ・マジョール大聖堂であったという。マルセイユの歴史に関する空想的な想像力はかき立てるけれども、言うまでもなくこれはおおよそあり得ない話である。

Bibliographie :

『新カト』第 1 巻、426 頁、1101-1102 頁、615-616 頁、第 4 巻、845-846 頁、第 3 巻、1167 頁；フォション（1976）190 頁；ヤコブス・デ・ウォラギネ（2006）第 3 巻、29-37 頁、493-504 頁；第 4 巻、128-131 頁；深沢克己（2017）41-50 頁；Amargier（1990）pp.13-42；Baratier（1966）pp.395-441；Baratier（1990）pp.40-72；Benoit（1933b）pp.173-206；Benoit（1936）pp.7-68；Benoit（1966a）pp.159-296；Benoit（1966b）pp.110-126；Boissieu et Arrouas（1986）pp. 9-39；Bouiron, et al.（2023）pp.214-225；Bridonneau（2008）pp.59-66；Démians d'Archimbaud et al.（1995）pp.121-141；Drocourt（1973a）pp.155-159；Drocourt, dir.（1973b）pp.16-17, pp.20-21, pp.23-25；pp.29-36, pp.39-44, pp.68-77；Drocourt（1974）pp.42-49；Drocourt-Dubreuil（1989）pp.3-12, pp.37-44, pp.47-58, pp.59-62, pp.79-87, pp.81-88, pp.95-105；Duprat（1944）pp.66-94；Ellul（1997）pp.4-24；Février et al.（1973）pp.133-139, p.173；Fixot（2001）pp.235-254；Fixot et al.（2014）p.6, pp.43-45, pp.46-51, pp.55-56, p.62, pp.78-85, pp.92-93, pp.97-101, p.116；Fixot et Pelletier（2009）pp.83-86；Fixot et Pelletier（2013）pp.115-119；Gaggadis-Robin（2009）pp.69-88；Gregoire de Tour（2020）chapitre 76, pp.222-223；Grosson（1773）pp.164-166, pp.174-179；Guyon（2013a）pp.95-96；Guyon（2013b）pp.184-185；Hartman-Virnich et al.（2001）pp.279-292；Moulinier（2002）pp.4-20；Rougé（1969）pp.85-99；Rouquette（1980）pp.425-451；Thomazeau（2007）p.21；RIP；GV.

略記号と参考文献

各聖堂のビブリオグラフィーでは、和書、翻訳書、欧文文献（ファーストネームは略）、GV と RIP、Web-site（WS）の順に記した。

『新カト』: 『新カトリック大事典』新カトリック大事典編纂委員会編、研究社、1996-2009 年
CAF: *Congrès Archéologique de France*. Paris, Société Française d'Archéologie.

CAG: *Carte Archéologique de la Gaul*. Paris, Académie des Inscriptions et Belles-Lettres.

CSAF: *Cahier de la Sauvegarde de l'Art Français*.

GV : Guide de Visite.

RIP : Renseignements ou Informations sur Place.

カエサル（1996）: 『内乱記』國原吉之助訳、講談社学術文庫、1996 年。

ストラボン（1994）: 『ギリシア・ローマ世界地誌 I』飯尾都人訳、龍溪書舎。

フォション、アンリ（1976）: 『西欧の芸術 1・ロマネスク（上）』神沢栄三ほか訳、鹿島出版会。

ヤコブス・デ・ウォラギネ（2006）: 『黄金伝説』前田敬作ほか訳、平凡社。

佐藤彰一（1995）: 「フランク王国」、柴田三千雄・樺山紘一・福井憲彦編『世界歴史大系・フランス史 1』、山川出版社、所収、129-182 頁。

瀬原義生（2011）: 『ドイツ中世後期の歴史像』文理閣。

中川久嗣（2017）: 「南フランス・イエールの中世キリスト教聖堂」『文明研究』第 35 号、2017 年、3 月、東海大学文明学会、73-96 頁。

奈良澤由美（2011）: 「マルセイユの古代末期から初期中世の教会遺構」『西洋中世研究』第 3 号、西洋中世学会、107-128 頁。

深沢克己（2002）: 『海港と文明－近世フランスの港町』山川出版社。

深沢克己（2017）: 『マルセイユの都市空間－幻想と実存のあいだで』刀水書房。

山瀬善一（1958）: 「バルセローナ伯支配下のプロヴァンス都市制度の動向」『国民経済雑誌』986 号、所収、27-43 頁。

Aghulon, Maurice, et Coule, Noël（2007）: *Histoire de la Provence*, Presses Universitaires de France, Paris.

Amargier, Paul（1990）: *Un âge d'or du monachisme Saint-Victor de Marseille (990-1090)*, Éditions P. Tacussel, Marseille.

Amargier, Paul（1995）: « Marseille et sa Major », in *La Cathédrale*, Cahiers de Fanjeaux, no.30, Éditions Privat, Toulouse, pp.61-77.

Aubert, Marcel, et al.（1961）: *L'art roman en France*, Flammarion, Paris.

Baratier, Edouard（1966）: « La fondation et l'étendue du temporel de l'abbaye de Saint-Victor », *Provence historique*, vol.16, pp.395-441.

Baratier, Édouard, dir.（1969）: *Histoire de Provence*, Édouard Privat, Toulouse.

- , dir. (1990) : *Histoire de Marseille*, Nouvelle édition, Éditions Privat, Toulouse.
- Benoit, Fernand (1933a) : « Marseille, La Major », in *CAF*, no.95, Paris, pp.157-172.
- (1933b) : « Abbaye de Saint-Victor », in *CAF*, no.95, Paris, pp.173-206.
- (1936) : *L'abbaye de Saint-Victor et l'Église de la Major à Marseille*, Henri Lauren, Éditeur, Paris.
- (1966a) : « Le martyrium de l'abbaye Saint-Victor », in *Provence historique*, vol.16, pp.159-296.
- (1966b) : « Le Martyrium rupestre de l'Abbaye Saint-Victor », in *Comptes Rendus des séances de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres*, 110e année, no.1, Paris, pp.110-126.
- Biarne, Jacques, et al. (1986) : *Topographie chrétienne des cités de la Gaule des origines au milieu du VIIIe siècle*, tome 3, Paris, De Boccard.
- Bizot, Bruno, et al. (2009) : *Guide Archéologiques de la France, Marseille antique*, Éditions du Patrimoine, Centre des Monuments nationaux, Paris.
- Blanc-Bijon, Véronique et Paon, Françoise (2011) : « Les mosaïques paléochrétiennes du groupe épiscopale de Marseille », in *Provence historique* tome 61, pp.135-156.
- Boissieu, Jean et Arrouas, Eric (1986) : *Saint-Victor: Une ville, une Abbaye*, Éditions Jeanne Laffitte, Marseille.
- Bouiron, Marc. (2001) : « Histoire et topographie des monuments de Marseille médiévale », in *Marseille : Trames et paysages urbains de Gyptis au Roi René*, édité par Marc Bouiron et Henri Tréziny, Études massaliètes, no.7, Édisud, Aix-en-Provence, pp.255-276.
- Bouiron, Marc, et al. (2023) : *Le Guide des sites de l'antiquité tardive et du haut moyen âge Ve-XIe siècle, Provence-Alpes-Côte-d'Azur*, Éditions Mémoires Millénaires, Saint-Laurent-du-Var.
- Bridonneau, Yves (2008) : *Naissance de la Provence chrétienne : La Chanson de Geste de la Madeleine*, Édisud, Aix-en-Provence.
- Bromwich, James (1993) : *The Roman remains of southern France*, London and New York, Routledge.
- Busquet, Raoul (1954) : « Le rôle de la Vicomté de Marseille dans la formation du Comté de Provence et l'origine de ses vicomtes », in *Provence historique*, tome 4, pp.67-74.
- (1997) : *Histoire de la Provence des origines à la révolution française*, Éditions Jeanne Laffitte, réimpression, Marseille.
- Clébert, Jean-Paul (1966-1992) : *Provence antique*, 3 tomes, Robert Laffont, Paris.
- Démians d' Archimbaud, Gabrielle et al. (1995) : « Marseille, Abbaye Saint-Victor. Vestiges

- paléochrétiens », in *Les premiers monuments chrétiens de la France, 1. Sud-Est et Corse*, sous la direction de Noël Duval, Éditions Picard, Paris, pp.125-141.
- Drocourt, Daniel (1974) : « L'abbaye Saint-Victor de Marseille », in *Archéologia*, no.66, pp.42-49.
- Drocourt, Daniel et Geneviève (1973a) : « Deux chapiteaux inédits du cloître de l'abbaye Saint-Victor de Marseille », in *Bulletin Monumental*, tome 131, no.2, pp.155-159.
- , dir. (1973b) : *Saint-Victor de Marseille : Site et Monument*, (catalogue d'exposition), Archives de la ville de Marseille, Marseille.
- Drocourt-Dubreuil, Geneviève (1989) : *Saint-Victor de Marseille : Art funéraire et prière des morts aux temps paléochrétiens*, Atelier du Patrimoine de la Ville de Marseille, De Boccar, Marseille.
- Duprat, E. H. (1944) : « Histoire des légendes saintes de Provence », in *Mémoires de l'Institut historique de Provence*, XX, pp.66-94.
- Ellul, Jean-Pierre (1997) : *Guide de l'Abbaye Saint-Victor de Marseille*, Sté. PEC, Septèmes-les-Vallons.
- Eydoux, Henri-Paul (1980) : *Monuments méconnus, Provence*, deuxième série, Librairie Académique Perrin, Paris.
- Février, Paul-Albert (1964) : *Le développement urbain en Provence de l'époque romaine à la fin du XIV^e siècle*, Éditions E. de Boccard, Paris.
- Février, Paul-Albert et al. (1973) : *Saint-Victor de Marseille, Site et Monument*, Catalogue de l'exposition rédigé par Daniel et Geneviève Drocourt, Archives de la ville de Marseille, Marseille.
- Fixot, Michel (2001) : « Saint-Victor, saint Victor, à propos d'un livre récent », in *Marseille : Trames et paysages urbains de Gyptis au Roi René*, édité par Marc Bouiron et Henri Tréziny, Études massaliètes, no.7, Édisud, Aix-en-Provence, pp.235-254.
- Fixot, Michel et al. (2014) : *Saint-Victor de Marseille : Le Guide*, Éditions Mémoires Millénaires, St-Laurent-du-Var.
- Fixot, Michel et Pelletier, Jean-Pierre (2013) : « Les sanctuaires en l'honneur des martyrs : l'exemple de Saint-Victor de Marseille », in *L'antiquité tardive en Provence (IV^e-VI^e s.) , Naissance d'une chrétienté*, sous la direction de Guyon, Jean & Heijmans, Marc, Éditions Actes Sud, Arles, pp.115-119.
- Fixot, Michel et Pelletier, Jean-Pierre, ed. (2009) : *Saint-Victor de Marseille, Étude archéologique et historique, Actes du colloque Saint-Victor Marseille, 18-20 novembre 2004, Bibliothèque de l'antiquité tardive, no 13*, L'Association pour l'antiquité tardive, Éditions Brepols, Turnhout.
- Gaggadis-Robin, Vassiliki (2009) : « La sculpture funéraire paléochrétienne à Marseille : Les sarcophages », in *Saint-Victor de Marseille : Étude archéologique et*

- monumentale, Bibliothèque de l'antiquité tardive, no 12*, par Fixot, Michel et Pelletier, Jean-Pierre, L'Association pour l'antiquité tardive, Éditions Brepols, Turnhout, pp.69-88.
- Gregoire de Tour (2020) : *La Gloire des martyrs*, Les belles lettres, Paris.
- Grosson, Jean-Baptiste (1773) : *Recueil des antiquités et des monuments marseillais qui peuvent intéresser l'histoire et les arts*, chez Jean Mossy, Imprimeur du Roi & de la Marine & Libraire au Parc, Marseille.
- Guyon, Jean (1995) : « Marseille : Baptistère Saint-Jean », in *Les premiers monuments chrétiens de la France, 1. Sud-Est et Corse*, sous la direction de Noël Duval, Éditions Picard, Paris, pp.142-146.
- (2013a) : « Le paysage urbain remodelé par les monuments chrétiens », in *L'antiquité tardive en Provence (IVe-VIe s.) Naissance d'une chrétienté*, sous la direction de Guyon, Jean & Heijmans, Marc, Actes Sud, Arles, pp.95-96.
- (2013b) : « La “jeune morte” de Saint-Victor de Marseille », in *L'antiquité tardive en Provence (IVe-VIe s.) Naissance d'une chrétienté*, sous la direction de Guyon, Jean & Heijmans, Marc, Actes Sud, Arles, pp.184-185.
- Hartman-Virnich, Andréas et al. (2001) : « L'architecture religieuse médiévale à Marseille », in *Marseille : Trames et paysages urbains de Gyptis au Roi René*, édités par Marc Bouiron et al., Éditions Édisud, Aix-en-Provence, pp.279-292.
- Lassalle, Victor (1983) : *L'influence antique dans l'art roman provençal, Revue archéologique de Narbonnaise*, Supplément 2, Éditions E. de Boccard, Paris.
- Marie-Pierre Rothé et Henri Tréziny, ed. (2005) : *Carte Archéologique de la Gaul, 13/3, Marseille et ses alentours*, Académie des Inscriptions et Belles-Lettres, Paris. (CAG)
- Moliner Manuel (2006) : « La basilique funéraire de la rue Malaval à Marseille (Bouches-du-Rhône) », in *Gallia*, no.63, pp.131-136.
- Moulinier, Jean-Claude (2002) : *Autour de la tombe de Saint-Victor, sa doctrine spirituelle*, La Thune, Marseille.
- Paone, Françoise (2011) : « L'ensemble ecclésiastique de la Major à Marseille », in *Archéologia*, no.490, pp.32-33.
- Paone, Françoise, Bouiron, Marc (2001) : « Le groupe épiscopal de Marseille. Nouvelles données », in *Marseille : Trames et paysages urbains de Gyptis au Roi René*, édité par Marc Bouiron et Henri Tréziny, Études massaliètes, no.7, Édisud, Aix-en-Provence, pp.225-234.
- Porter, Arthur Kingsley (1923) : *Romanesque Sculpture of The Pilgrimage Roads*, vol.1, Marshall Jones Company, Boston.
- Rougé, Jean (1969) : « À propos d'une inscription de Marseille : Martyrs ou périls en mer ? », in *Revue des Études Anciennes*, tome 71, 1969, no.1-2, pp.85-99.

中川久嗣

Rouquette, Jean-Maurice (1980) : *Provence romane 1 : La Provence Rhodanienne*, Zodiaque, La Pierre-Qui-Vire.

Roustan, François (1905) : *La Major et le premier baptistère de Marseille*, Aubertin et Rolle, Marseille.

Thomazeau, François (2007) : *Marseille insolite, les trésors cachés de la cité phocéenne*, Éditions Les Beaux jours, Paris.

Vallery-Radot, Jean (1938) : « Les dates des autels de la Major de Marseille et de Saint-Guilhem-Le-Désert », in *Gazette-des-Beaux-Arts*, Juillet-août de 1938, Paris, pp.73-80.

Web-site

« Inrap, Une visite virtuelle de la Vieille Major, l'ancienne cathédrale de Marseille »

<https://www.la-grange-numerique.net/VV-vieillemajor/index.html>

(2025.10.20 アクセス)